

目 次

聖訓摘要……………	日生上人
破邪顯正(其一)……………	磯部滿事
人生と法華經(其六)……………	池ノ内三雄
法華經講話(第三十講)……………	小林一郎
さる未亡人……………	笹木欣爾

○福島支部報 ○寄附金維持團費誌料領收

第四十一一年六月號



統

法財  
人同  
統  
一  
團  
發  
行



# 財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持続セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

## 本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ離出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

# 聖訓摘要

## 日生上人

### 窪尼御前御返事

この中にも特に引く所が無い。

### 南條殿女房御返事

女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる、法華經供養の功德かさなれば、あに龍女があとを繼がざらん。

(編刷遺文錄)  
(一七二八)

これは女人に與へられたのであるが、中々手殿しい事を言はれて居る。女が嫉妬の煩惱を燃やして、その嫉妬心が向上すれば、遂に毒蛇に生れて行くものである。けれども法華經の信心をしてその方で功德を積み、法華經提婆品にある龍女の後を繼いで、女人成佛を遂げられるものである。同じ蛇でも毒蛇になるか、龍女の成佛の後を繼ぐか、それはあなたの心次第であるといふので、尚に女子に取つては



痛い教訓であると思ひます。又事實その通りでありませう、女人は決して罪な者でも何でも無い、男子と少しも違はぬ尊い佛性を有つ者でありますけれども、併しいろ／＼の事情に依つて婦人は嫉妬を起すとか、いろ／＼やけな精神に成り易い事情もあるのである。それは亭主が悪い爲めでもあり、社會が悪い爲めでもあり、子供が苦勞をさせる爲めでもあらうけれども、兎角女は餘りに精神を苦しむるが爲めにいろ／＼と間違ふ譯である。だから餘程熱心な信仰をしないと、一時信じたやうでも直きフラ／＼して来る、女は熱心なりと言つてもどうも退轉し易いものである。そこに行く男子の方がどうもえらいやうである、と言つて別に女子を攻撃する譯でもなければ悪口言ふのでもないが、どうも女は感情的に出来て居るから、一時はその代り男よりも熱心であるが、歳月を経ると氣の抜ける所がある。所が腹を立てたりする方は中々氣が抜けない、去年の夫婦喧嘩を未だ怒つて居る、三年経つてもブリ／＼して居るといふやうな事がある。善い方は存外早く氣が抜けるといふ點は、女子に取つて大いに注意しなければならぬ大事な點であると思ふ。

### 日女御前御返事

この中に於て極く簡單な一言を御紹介したい。

國に聖人あれば其の國破れず、(繪圖遺文錄 一七三三)

國家の盛衰といふものを今は民意といふ事に依つて言うて居る、成程民意も大事である、民意が去つたならば國家は亡びる、國は民を以つて本と爲すといふことはいへるけれども、唯だその一つだけ知つて居るのは、一を知つて二を知らぬ者だと思ふ。「大勢の考へが大事ぢや大事ぢや」といふことだけ知つて居つても、馬鹿ばかりになつたら、その大勢の考へでは駄目である、そこでやはり國は聖人——或は哲人と言つても宜い、兎に角えらい人といふ者がなければならぬ、大勢も大事だがえらい者も大事ぢや。今日は兎角「大勢が大事ぢや」といふ事だけ知つて、「えらい者も一人は一人ぢや」といふやうな事を言ふが、それは「鯨も一疋、鰐も一疋」と言ふやうなもので、同じやうなものだがその價值は大分違ふ、鰐は一疋高價でも二錢かそこらである、鯨は如何に踏み倒しても一疋五錢や十錢の鯨は何處にもない。人間の價值といふものは鯨と鰐とどこではない、もつと非常に違ふ、例へば釋尊の一人、孔子の一人、聖徳太子の一人といふやうな方と、それから泥棒や人殺をして巢鴨の監獄に入つて居るやうな世の害物となるやうな者一人との價值はどの位違ふか、ちよつと相場を附けて見給へ、牢から出せば他人の家に押込んで行つて、子供を叩き殺して女を辱かしのめるといふやうな、狼のやうな人間と、それから釋迦様や聖徳太子のやうな人とは、相場を附けても附けやうがない位違ふぢやないか、同じ價值といふ譯には行くまい。そこで今は餘りに民意とか平等とかいふ事の一面を知つて、國家に賢哲の尊い事を忘れるといふ傾向がある、これは恐るべき結果を來たすものである。それ故に日蓮聖人が「國に聖



人あれば其の國破れず」と言はれた事は、簡単な言ではあるが非常に大事なことだと思ふのであります。

四

### 兵衛志殿御返事

### 中務左衛門尉殿御返事

### 窪尼御前御返事

これは孰れも摘出する所がありません。

### 妙法尼御前御返事

水の底なる石に火のあるが如く、百千萬年くらき所にも燈を入れれば明るくなる。世間のあだなるものすら尚ほ加様に不思議あり、何に況や佛法の妙なる御法の御力をや。我等衆生の惡業、煩惱生死果縛の身が、正、了、縁の三佛性の因によりて、即ち法、報、應の三身と顯はれん事疑ひなかるべし。(繪圖遺文録 一七四三)

これも非常に大事な御文章で、永い間水の底に沈んで居つた石には、モウ火があるとは思はれぬけれども、さうではない、千年萬年海底に沈んで居つた石でも、取出して燈金を當て、カチツとやれば直ぐ火が出るが如きものである、どれ程落ぶれて地獄の底、餓鬼の底に落はてた者でも、又人間の中では最も見捨てられたる監獄住みをして居るやうな人間のその中にも、その精神を取出して或る縁を與へれば、尊い佛性の光といふものが直ぐ出て来るものである、水の底にある石にも火を發するが如く、又暗がりの土藏の中に閉ち籠められて居つて、百年千年萬年冥々暗がりであつたからと言つても、其處に蠟燭の火を點ければ直ぐ明るくなる、電燈があるなれば電燈を捻りさへすれば、その瞬間に明るくなるが如く、吾々の心が百年暗がりであつた、千年暗がりであつた、永い／＼迷ひであると言つても、其處に光を點すべきものに依つて導けば、即時に明るくなり、心機一轉すれば直ちに立派な人に成るものである、これは實に人間の尊い所でありまして、世間の石でさへもさうであり、暗室でさへもさうであるから、況んや佛教の大なる御法の御力に依つて、吾々衆生の有つて居る所の正、了、縁の三佛性に依つて法、報、應の三身の如來と成ることは疑ひないといふ事を言はれたのであります。

この正、了、縁の三佛性といふ事は、ちよつと解釋を要するかと思ひますが、佛性論といふ事は佛教に於て餘程大事な問題である、一つは佛に關しての本佛論であるし、一つは吾々自身に就ての佛性論であり、モウ一つは宇宙の諸法實相であります、先づ直接宗教の信仰としては佛性の問題である、ナンボ叩いても佛性がなかつたら何にもならぬ、「砂を搾るに油無し」と言はれた通り、砂を袋に入れて搾つたなら



ば、何年経つたつて油一滴出て来ない、砂と同じやうに見えても菜種であるから搾れば油が出て来るのである、己れに佛と成るべき性分がなかつたならば、どんな佛様が来て導いて呉れても駄目である。卵のやうな形はして居つても石であつたならば、親鶏がいくら温めて呉れた所が雛鶏は孵化しないのである。本當の卵であるが故に、腐つて居ないが故に親鶏の温もりを受けて雛鶏と孵化するのである。その意味合を、己れに有つて居る所の佛性の意味合から信仰の基礎といふものを築いて行くのが法華經の教である。だからこの三因佛性といふ事を明かにしなければならぬ、三因佛性の一つは「正因の佛性」といふ、これが今いふ皆自ら有つて居る所のものであつて、正しくそれが種になつて居る、卵それ自身の如きものである。所が之れを孵化す所の縁といふものが要るのである、卵の例で言へば親鶏が温めるといふことがなければならぬ、之れを米に譬へたならば、稻の種そのものは正因だけれども、土もなければならぬ、又太陽の温度もなければならぬ譯である、他の縁といふものが要るのである。米の譬や卵の譬へでは能く判らないかも知らんけれども、之れを人間が産れて来る譬にすると一番能く判かる。即ち正因といふのは女人であつて、女人は子を産むべきものであるけれども、女人一人では子は産れない「お前も女だから一つ子供を産まぬか」と言つた所が、娘が子を産む譯には行かない、それで子を産むべき所の縁といふものがこれに加はつて行くのである。その縁が二つに別れて居る、それが即ち「了因」と「縁因」といふのである。之れを全體を二つにして言へば「正因」と「縁因」の二つで

宜いのである、けれども、その縁因の中の主因と言つて主なるものを「了因」といふ。そこで三つにしていへば正因、了因、縁因、即ち正了縁の三因といふ事になるのである。その了因といふのは何處から来たかといへば、これは部屋の暗い所を明るくするといふ今の譬から来たのであつて、バツと火を點けるやうに、この佛性に一つの光を與へるものが他から来る。それを言つたのである。これが今の子を産む譬に就いていへば夫のやうなものである、亭主がなければ女は子を産まぬといふ事になる。そこで亭主さへあつたらどんな女でも子が産まれるかといふことになる、さういかぬ、それはどういふ譯かといふと、婦人が亭主さへあれば子は出来ると言つて、飯も食はなければ牛乳も飲まないで、「亭主さへあれば宜い」といつて亭主ばかり可愛がつて居つた所で、それでは段々瘠せてしまふ、さうしたらやはり子供は産れないのであるから、そこで亭主の外に自分に健康を維持する所の養生といふか衛生といふか、その養生といふものがあつて、健康體を維持して行かなければ子供は産れない、その健康を維持する方法が即ち「縁因」である。之れを吾々に譬へて言へば、本來有つて居る所の自己所有の佛性、本具の佛性といふものが正因である。了因佛性といふのは、即ち信仰の中心である。本佛より来る所の本佛の感應といふものが即ち佛性に響いて来るのである、佛性の亭主は即ち本佛である。この佛性を外の理か何かに取らうものなれば、どうしても佛の子は産れて来ない。日蓮聖人が「本尊鈔」の中に面白い事を言ふてある「王女の畜種を懐妊するが如し」——王女といふのは王様のお姫様で、畜種といふのは



畜生の種である、さうすれば「その子は旃陀羅にも劣るが如し」とある、吾々は皆佛性を有つて居るけれども、蛙などを拜んで「蛙様々々」と言つた所が、その蛙と感應して佛性が眼を醒して出て來るといふことは決してない、それはお玉じやくしが出て來ることになる。そこで今の様な何でも構はぬといふので、鬼子母神なら「鬼子母神様々々々々」と言つて居ると、佛の子が産れないで口が歪に切れたやうな者が産れて來ることになる。さういふものはいかぬ、我が佛性の夫たるべき者は、唯一の本佛釋迦牟尼世尊であると決定したのが「開目鈔」の教である、之れを了因といふ。その了因の所に宗旨が立つのである、信仰は嫁に行くやうなものである、何も知らないでも宜いと言つて亭主が判らぬで嫁に行けるか、何にも知らないでも宜い、唯だ南無妙法蓮華經さへ言へば宜いといふのは、嫁に行きながら其處に出て來た下足番が亭主やら、風呂焚の爺が亭主やら判らない、「亭主ナンか誰でも構はぬ、行き當りばつたりやれ」といふやうなものである、それでは駄目ぢやないか。だから宗教といふものは、唱へ言葉といふやうな事から先に入るからさういふやうな間違ひも起るのだけれども、吾々本來有つて居る所の絶対の佛性がある、之れを啓發する力といふものを本佛釋尊から戴くといふ事を第一に意識しなければならぬ。大和魂として考へたならば、吾々の大和魂は皇室の尊嚴、皇室の稜威といふ事を考へた時その皇室の懿徳と大和魂との感應する所に本當の日本人が産れて來る、何でも宜いといふ譯にはいかぬ、假令東郷さんが如何に偉からうとも、この大和魂といふものは、吾々が「東郷大明神」と言つたんでは出

て來ない、皇室の尊嚴、皇室の稜威でなければならぬ、これは皇室に限る。そこが即ち宗教の議論の生命になつて來る、それを阿彌陀さんで間に合さばうとする者があるけれども、阿彌陀様が如何にえらくとも怡度朝鮮の王様のやうなものである、朝鮮の李王家に對して「李王様が有難い」と言つて居つては大和魂にならぬと言つたのが、日蓮の議論の論法である。「そんな事はどつちでも宜しい」といふことになつて來たのが崩れ法華といふものぢや、そんな馬鹿なことがあるか。命に代へても日蓮主義者はこの點だけは許せない、國民の道徳としては皇室の尊嚴に感激しない間は本當の日本人になれない、顔は日本人、言葉も日本人であつても、皇室の尊嚴に感激して、どうしても或る場合に於ては生命を捧げて皇室に報ひなければならぬといふことがハツと誓いた時、それが本當の日本人である。それが判らぬ者は偽日本人ぢや、法華宗で「ナンメウ〜」と言つた所が、本佛に感激せぬ者は偽信者といふものである。他の事は私は喧ましく言はない、無闇に面倒なことは言はないけれども、この大事な親を取違へたり、君を取違へたり、佛を取違へたりするやうな者を許すといふことならば、道徳も宗教も要らぬものになつてしまふ。

だから今申す通り本佛といふものが了因佛性といふ即ち女人に對する夫である、夫があるから子供が産れて來る。そこで先づ女は女たる性質を失はないが如くに、自分の佛性を傷けないやうに、それから夫を大切にすることが如くに本佛との關係を間違へないやうに、モウ一つは女が腰が冷ぬやうにとか、御



馳走を食るとかいふやうな工合に信仰といふものをしなければならぬ、即ち本佛といふものを一番大事にしなければならぬのである。女房は自分の夫を大事に、又自分の體を大事にするやうに、信仰する者は佛性を愛護し、本佛を渴仰する觀念から一切の善根功德といふものが起つて来る、「縁因は六波羅蜜なり」と言つて、諸の善根といふものが縁因になつて居る、そこで佛に對する感應といふ茲に信仰がある、だから法華の行者は自分の有つて居る佛性を自覺し、それから本佛に對する信仰とあらゆる善根とに依つて進み行つて、遂に佛様になつてしまふのである。それを例へば水の底にあつた石にも火があつて如くに、汝等は皆正、了、縁の三佛性を有つて佛様に成ること疑ひないぞと仰しやつたのであつても、法華經の教に依つて導かれ、日蓮聖人に依つて刺撃を興へられるのは、良き燈金に依つてたゞかれたやうなものである、そこで本具の佛性が眼醒めて本佛を信仰することになる。どうしてもこの本佛に對する、燃るが如き渴仰の精神といふものがなければ佛教は駄目である、それを無くしては成佛は出来ない。

種種物御消息

源にこりぬれば流きよからず、天くもれば地くらし。(維摩經文殊) 一七四五

これは別段大した意味で引いたのでもありませんが、恰度「觀心本尊鈔」にある「天晴れば地明かなり」といふことが盛んに行はれて居る、これはその裏を言うてござる言葉であるから覺えて置いて宜からうと思ふ。殊にこの「天曇れば地暗し」といふ方も、今は相當入用であらう、今日の日蓮主義などは「天晴地明」といふよりは「天曇れば地暗し」といふやうなことが餘程實際的ではないかと思ふ、恰度梅雨期みたやうなもので、何日経つても「今日も雨か明日も雨か」で少しも晴れて居りはせぬぢやないか、何處に法華の教化に依つて天晴れ地明かになつて行き居るか、法華經ありと雖も人心を教化する力といふものは少しも起つて来ない今日は有様になつて居ると思ふ。であるからこの言葉を一つ記憶して置いて大いに反省するが宜からうと思ふ。「天晴地明」も下手に行くと「天曇地暗」といふことになつてしまふぞといふ警告の爲めに、之れを引證して置きたいと思ふ。

時光御返事

この中には引くべき所がありません。

妙法尼御前御返事

夫れ以れば日蓮幼少の時より佛法を學び候ひしが、念願すらく人の壽命は無常也、出る氣は入る氣



を待つ事なし、風の前の雲尙ほ譬へにあらす。かしこきもはかなきも、老たるも若きも定め無き習ひ也、されば先づ臨終の事を習ふて後に忙事を習ふべし。(縮刷遺文録) 一七五〇

これも名高い御書で、日蓮は若い時分から佛法を學ぶに就ては小さな願は有つて居らない、立正安國の考もありいろ／＼あるけれども、自分に就ては何時死ぬかも知らぬから、死んでもマゴつかぬやうにしたいといふ決心でやつた、全く人生といふものは賢きも愚きも、老たるも若きも何時死ぬか判らぬといふ恐しい事實があるのであるから、何時死んでもマゴつかぬだけの覺悟を定めて置かなければならぬ。であるから、先づ臨終の安心立命をして置いて、それから他の仕事をしなければならぬといふ事を言はれたのであります。

### 千日尼御前御返事

一代聖教の中には法華經第一、法華經の中には女人成佛第一なりとことわらせ給ふにや。されば日本一切の女人は法華經より外は一切經には女人成佛せずと嫌ふとも、法華經にだにも女人成佛ゆるされなば何か苦しかるべき。(縮刷遺文録) 一七五六

法華經が一切經の中に於て第一であるのは今更いふ迄もない、その第一と言はれた結構な法華經の中には女人成佛の事が説いてある、それが殊に有難い教である。それ故に女人の立場から考へて、これ程澤山のお經に女人を攻撃するやうな事が説いてあつても、法華經が女人の味方であり、女人の成佛を許して呉れるならば、假令法華經は一つでも、味方のお經が眞實で、反對するやうなお經が方便であるならば、何も恐るゝに足らぬぢやないか。その點から考へても法華經は女人に取つて洵に有難いお經であると言はれた。

父母の恩の中に慈父をば天に譬へ、悲母をば大地に譬へたり、いづれも別けがたし、其の中にも悲母の大恩ことに報じ難し。(縮刷遺文録) 一七五七

父母の御恩は、父を天に譬へ、母を地に譬へて、天の徳、地の徳何れも有難い譯であるけれども、殊に母の恩が重いと説かれた、『その中にも悲母の大恩殊に報じ難し』といはれた所が日蓮聖人の尊い教である。この事は詳しく申す時間も無いが、非常に大事な問題である。元來日本に於ては武士道から見ても儒教から見ても、女を餘程軽く見て居る、母と子の關係といふものを明かにしない、『腹は一時の借物ぢや』ナンと言つて、母親を借家みたやうに考へて居る、これは大變な間違ひである、借物どころではない、吾々の身體といふものは大部分は母の營養を通して來て居る、父も無論有難いけれども、父の方に重くあつて母には何もないなどは、事實上に於て非常な間違ひである、精神的關係に於ても母の愛といふものが大部分吾々を大きくして呉れて居るのである。

悲母の恩を報ぜんために此の經の題目を一切の女人に唱へさせんと願す。(縮刷遺文録) 一七五七



母の御恩報じの爲めに日蓮は日本の女に法華經の信仰を弘めて行つた譯であるといふことをいはれた。女人こそりて國主に讒言して伊豆の國へ流せし上、又佐渡の國へ流されぬ。こゝに日蓮願つて云く日蓮は全く誤なし、設ひ僻事なりとも日本國の一切の女人を扶けんと願せる志はすて棄かるべし。(縮刷遺文録一七五九)

これは日本の婦人の人が日蓮聖人に對して御禮を申上げなければならぬ事である、日蓮聖人は非常な決心を以て言ふて居られる。どういふものか日本の婦人が日蓮に味方をしない、却つて尼御前達が讒言の仲間に入つて居る。それはどういふ譯であらうか。日蓮聖人を頭の座に据えたのも女の力が關係して居る、佐渡ヶ嶋に流したのも女の力が關係して居る、日蓮は女人成佛の法華經を提げて、婦人の爲めに非常なる志を立て、居る者であるにも拘らず、それを讒言して伊豆の國に流し、佐渡の國に流すといふのはどういふ譯であるか、自分が振りかへつて考へて見ても、日蓮には一點悞がない、日蓮の主張して居る法華經の教に就ては間違ひがない、假に少し位日蓮に間違ひがあるとしても——茲が何時も日蓮聖人の筆法の強い所である——日本國の一切の女人を助けたいと、日蓮は婦人の爲めに起つて女人成佛を主張し、法華經に依らんければ女人の地位を高めることが出来ない、阿彌陀經のやうな泣聲ではいかぬと思ふて、日蓮は日本の女人の爲めに斯の如き奮闘を起して居るのである、その志は捨て難かるべき事であらうにも拘らず、日蓮は左様に女人の爲めに盡すにも拘らず、女人が讒言の魁をするといふこ

とは淺ましい事であると言はれた。これは今でも考へなければならぬ、唯だ感情に走つて、日蓮は無闇に強さうなことを言つたといふやうな事で、日蓮聖人を見る人もありませうけれども、それは實に相濟さぬ事でありませぬ。

阿佛房に禮を背負はせ、夜中に度度御わたりありし事、何時の世にかわすらむ、只悲母の佐渡の國に生れかわりて有るか。(縮刷遺文録一七六〇)

これは阿佛房の妻千日尼が日蓮聖人に盡した事にお禮を仰しやつたので、先きに言ふやうに日本の女人は背反對したけれども、あなたは能く日蓮を助けて呉れて、夫の阿佛房に飯櫃を背負はせて、夜な／＼人の寝静まつた頃に塚原三昧堂に持たして遣して呉れた、あなたばかりは日蓮を助けるが爲めに左様に親切にして下さつた、これは日蓮の母親が佐渡の國に生れかはつて日蓮を助けて呉れるのかと、嬉しく考へたと言はれて居る。その次のも身延に入つてからの事を言はれて居る。

去る文永十一年より今年弘安元年までは、すてに五箇年が間此の山中に候に、佐渡の國より三度まで夫をつかはす、いくらほどの御心ざしぞ、大地よりもあつく大海よりもふかき御心ざしぞかし。

(縮刷遺文録一七六一)

今度は日蓮が歸つて身延の方へ入つた爲めに、佐渡ヶ嶋から夫阿佛房を使ひにして、五年の間に三度もいろいろの御供養を持たして遣された、今日でも佐渡から身延に行くといへば中々不便である、況ん



やその時分の事であるから容易な事ではない、それを阿佛房にいろ／＼の物を持たせて、遠い／＼佐渡ヶ嶋から甲州身延の山中にまで日蓮聖人をお訪ね申して、いろ／＼心を盡された。これは名高い話であつて、男の方では四條金吾が最も名高い譯であるが、女の方ではこの千日尼が一番名高い方であつて、御遺文中千日尼に對する御書は澤山ある譯であります。

### 彌源太入道殿御消息

この中には別に引くべき所がありません。

### 妙心尼御前御返事

日蓮は日本第一のふたうの法師、ただし法華經を信じ候事は一闍浮提第一の聖人也。其の名は十方の淨土にきこえぬ、定めて天地もしりぬらん、日蓮が弟子とならせ給はゞ、いかなる惡鬼等なりとも、よもしらぬよしは申さじとおほすべし。(繪圖遺文錄 一七七七)

これも實に痛快な御書である、日蓮は日本の判らすやの方から言へば、不當な悪い事でもした坊さんのやうにいふけれども、法華經を信じて法華經の教の通りにやつた點からいへば、全世界に於て日蓮が一番正しくやつた者である。人間の感情からいへば、日蓮が氣に入るとか氣に入らぬとか仰しやるでせ

うけれども、お釋迦様の教の通り、法華經の教の通り、命にまで懸けて一點瑕をつけずにやつた者は日蓮自身である。好き／＼はその人の感情である、法華經の教訓は儼然として今尙ほ日月の如く輝いて居る、日蓮の教へし所、何處に誤りがあるか、好きだの嫌ひだのといふのは、詰らぬ個人的感情であるだから世間からいへば日蓮は日本第一の不當の法師、没分曉漢と言ふだらうけれども、法華經から見れば全世界第一の聖人である。それ故に日蓮の弟子信者であるならば、何處に行つても、佛様の世界にも日蓮の名譽は能く聞えて居るから、十方の淨土には無論聞えて居る、如何なる場所にも聞えて居るから、惡鬼羅刹の仲間にも噂とり／＼であらう。だから如何なる羅刹が捕へに來やうとも、「こら待て、俺は日蓮の弟子信者である」といへば「さうでしたか、それは人を見違ひました」と言つて、惡鬼羅刹が逃げて行くだらうと言はれた、實に痛快なことでありませう。この信念なかるべからず、それが爲めには己れの信仰を正しくして行かなければならぬ、それは難かしいことは要らない、法華經の教、壽量品の教のやうに、自分の精神を柔順に従へて行きさへすれば宜いのである、何も判らぬのに手前味噌をつけて、勝手な事を言ふ必要はない。お自我憐れらるゝは讀んで見たならば、どういふ意味のものであるか一通り判るでせう、文の底ぢやとか横ぢやとか言つて、好い加減の事を言つて見た所が詰らぬ事である、自分の常識の上から能く讀んで見たならば、大體どういふものだといふことは判かる、さうして日蓮聖人の御遺文を拜して行けば、正しき信仰は自から定つて來ると思ふのであります。



破邪顯正 (其一)

磯部滿事

緒言

先日ある教團の知人が、日蓮宗もよいが、アノ他宗を破拆するやうな態度はやめてほしいものだ、アレデハ一天四海皆歸妙法どころか、却て世間から嫌はれて小さいものになり下がるであらう、人の道教團などはどんな信仰の人でも、悉く包容するだけの雅量を持つてゐるから、毎日幾百といふ新入會者があるを申して居た。のみならず、宗門の中に於ても現代は最早折伏の時代ではない、徐ろに自己反省の懺悔を先とし、攝受行であらねばなるまいといふ説が擡頭してゐる。では折伏とは一體どんな意味なのかと推斷するに、徒らに他宗を攻撃し激論して痛快

がるやうな傾向に見られてゐることが根本的の誤解でないかと思ふ。詮する所、折伏とは對手の間違を是正して向上せしむる悲母の愛見に對する慈悲の發露である。日蓮聖人晩年の御書、諫曉八幡鈔に「日蓮は去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今年弘安三年庚辰十二月にいたるまで二十八年が間、又佗事なし只妙法蓮華經の七字五字を日本國の一切衆生の口に入んとはげむ計り也。此れ即ち母の赤子の口に乳を入んとはげむ慈悲也」と仰せられたことを深く味ふべきである。更に又佐渡の苦難迫害の巷にあつても「鳥と蟲とはなげども、なみだをちす、日蓮はなかねどもなみだひまなし、此なみだ世間の事には非

らず但偏に法華經の故也、若しからば甘露のなみだとも云つべし」等の御文章を拜しては、日蓮聖人のお心持ちなりその折伏行とはどんなものか、略推察さるゝであらう。

かゝる立場から近頃の新興類似宗教の内容を二三剔抉して之に乗ぜらるゝことのないやうに、さうして正しい教の光顯の一助に資したいと思ふ。

人の道教

人の道教に於ては、これといふ教義内容は持つて居ない。教宣とか神律、神訓といふものがあるけれども、それは甚だ貧弱なもので、従つて表面に押し立てる教義としては、實に教育勸語を擧げてゐる。これこそ日本精神高調の浪に乗つて來た譯である。曰く、「教育勸語こそは眞の人間の道を説き示されたもので、この教育勸語の説示を忠實に實踐する限り、人は必ず幸福であり得るものであるが、然るに

人が種々の苦難を受けねばならぬのは、教育勸語に示された人の道を實踐せない爲であつて、一切の個人の乃至社會的苦痛災禍は、この人の道を踐み外した爲に起つた神意の警告、即ち神示である。されば病苦、災難、貧困等一切の不幸に遇ふのは、それが神示であることを自覺して、速かに神宣を頂戴して人間としての正しい道を行ひ、而して本來の幸福な生活を樂しめよ」と。

これ一應は至極結構な尤もらしい説き方であるが再應吟味する時に、若しこの教育勸語を實踐しない場合は、誰でもが病氣になるとか、貧乏になるとか或は災難を受けるといふ計りでなく、現實生活に即せる一切の災禍といふものは、全く教育勸語の御趣旨を實踐せない爲めの神示であるといふ如きは、既に迷信化で、たとへ高貴の方でも罹災避ばすのは、凡て非國民的行爲であつた爲めと結論されねばなるまい全く、畏れ多い話である。かくの如きは第二の大



本教であるまいか。

更に又彼等のいふ神示なり神宣には、人類の社會に於ける一切の災禍苦難といふものは、それは人間が神の意志に反してなせる行爲から招來された神示であるといふことで、これが人の道敎團の中心敎義である。随つて病に悩み、貧に苦しむものは、夫等の苦惱が如何なる行爲から惹き起された神の警告であるかを知り、神の意志に順ふことに依つて、これ等の苦惱を免れなければならぬ。かくの如き神の意志を傳達するものが所謂神宣であり、この神宣は神人合一の境地を體得した敎祖のみが知り得るのであるが、現在ではこの敎祖の神宣を代行し得る准敎祖なるものが、數人あるといふて居る。かうした人の道は病氣を治し、金を儲け、夫婦和合して、家庭を明朝にし幸福な生活を営み得ることを、神の名に於て説くのである。

この神宣なるものが、實に迷信邪教たる根源であ

法で、迷妄の者の弱點を衝くのである。斯く神宣なるものは、神の名に於てなせる、劣悪な偽善行爲であるが、そこにかゝる類似宗教の隆盛を見る所以でもある。といふのは、かゝる團體を訪れる人達は、或は精神的苦惱にあるもの、或は貧窮の極地にあるもの、或は醫師に見放された病人等の如く、すべて健全な理性と意志及び情操を喪失せる所の一種の欠陥を有つ人々であつて、夫等が自己の苦痛懊惱から免れんとして、投機的な氣分で來るからして、その神宣のどんなものに氣付く餘裕はない。理性の眼を失ひ、意志の弱い不具者には正しい聲は耳に入らないで、却て渴して海水を飲むの愚を肯てするものである。而して早起して新鮮な空氣に浴し、群衆心裡に魔せられ、偶特定病氣に於て、かくの如き精神統一の純一性に依つて、病氣が癒え、貧苦から免れたとする、この敎團に對する渴仰は益々熱烈となつて、その效驗顯著なる宣傳に依つて更に教線

る、畢竟人生一切の災禍が神示であるといふならば、神は何故に神示に於て、神の意志を暗示することが出來ないであらう。敎祖のみが神の意志を知ることが出來るといひつゝ、これを代行する准敎祖が敎團の膨脹と共に増加し、更に敎團を訪れるもの、境遇事情等を聞き終つて、それに對應すべく神宣が下されることは、敎祖及び准敎祖の臨機的斷案に於ける一種の處世法以外の何物でもないではないか。天理に依る災禍の俗惡愚劣な説明が神宣に外ならない。實に神宣なるものは、理智的判斷なく、盲目的な感情的基礎の上に立てられたもので、幼稚な聯想に依つて誘發せられたものに過ぎない。その聯想は全く臨機應變、變幻自在な敎師の練達に依り、その中心をなすものは、言語の類似、即ち語呂の一致に依る聯想であり、或は型態の類似、或は偶然の機會の一致を、必然の一致と考へしむるやうに極めて巧妙な方

は擴張されるのである。併し反對にその效驗を示さない場合には、その信者は却て信仰の未熟を責められ、遂には最大の不幸を見ても不得已泣き寝入りするので、其の出入の頻繁なことを想ふ時に、これ等の害毒に戰慄を禁じ得ないものがある。豈獨り大本敎のみならんやである。

先頃牛込のある家庭に於て、主人は職務上、北海道に單身出張し、二三年毎に一回歸京することにし、夫人は愛兒を高等學校其他に通學せしめて其の成育を樂しみ留守を持つて居たが、不圖した事から人に誘はれて一二人の道敎團に足を運んだが、夫婦は離別生活すべきものでない、子供は捨て置いても獨立自營するとの話を率直に信じて、遂に子等を殘して主人の許に走つたといふ創作のやうな事實があるが、毎朝冬の寒い時の朝詣りでも、家には四五歳から七八歳の幼兒を捨ておいて出掛ける夫婦者も實見して、何と子供達は可愛想ではないかと注意した



が、何にあまり親が面倒を見過ぎると却て子供は獨立心がなくなつてしまふ、捨て置いても空腹になればお食事も採りませうし、時間も遅れないやうに學校へも獨りで出かけますと教團で申されたから、それで宜しいのですと言つて居る。これ等の事柄は些細なやうであるが、親子の情操に於て遂には西洋式に流れ、やがて幾年かの後には在來の日本の家族制度は破壊され、忠孝の道德は無視されて、各個人本位、夫婦中心の社會を出現するであらう。志ある人はどう考へられる歟。

最後にお振替といふものを見ると、これは人生の不幸病魔が襲来しても、神宜を乞ふにオインソと行かず時日のある場合、その苦痛を免がれる爲めにお願ひする便法である。例へば、病氣で、どうも苦しくて困る時、お振替を願ひますと云へば、教祖或は准教祖は、受難者に代つて災害を受けて呉れるのである。従つてかくの如きお振替の爲に、教祖なり准

教祖は何時も吐血したり、腹痛であつたり、何處かに肉體的苦痛を負ふてゐる。これを黙過することは出来まい、醫者にかゝつても直ぐ高い價をせられる。教祖が病人の爲めに代つて苦しまれることをどうしてそのまゝみ過ごされようかといふのである。而して多數信者のお振替に依つて苦痛を負へる教祖准教祖は一ヶ月に一度お振替祭を催して、その間身代りとなつた病氣を洗ひ清めるといふのである。

かかる荒唐無稽の説示が、昭和の聖代に公然と驚くべき力で漫延してゐることは、文化と迷信は正比例するものを立證するやうに思はれる。即ち生活苦から種々の迷信邪教が横行するに到ることを想ふ時寒心せざるを得ない。詮する處、人の道教なるものは、治病と金儲と男女關係を好餌とした、本心を喪へる迷へる人々を僞瞞する宗教の徴であつて、然かもそのインチキ振りを、畏多くも教育勸語に依つてカムフラージュせる點は、識者の嚴正なる批判に俟つ所である。(次續)

# 人生と法華經 (其六)

## 池ノ内三雄

### 懺悔篇 第一

#### 七、半生の懺悔

##### ◇ 共產主義運動

一九二六年の秋から二七年にかけて、日本共產黨指導の下に開かれた議會解散請願運動、對支非干涉運動、工場代表者會議運動、五法律要求運動等は、吾々が最も精力的に支持し参加したのでありますが、これ等の闘争は、すでに他の多くの同志によつて、詳しく述べられた所であるから、私は詳しくは述べませんが、たゞ一言言つておきたいことは、對支非干涉運動に就てであります。この問題は代表陳述で、同志徳田が詳しく述べて居りますから、私は日本共產黨指導の下に革命的労働組合としての東京合同が如何にこの反戦闘争を支持し、具體的に闘争を展開したかに就て述べやうと思ふ。

我々は一九二七年春日本共產黨指導の下に組織された、對支非干涉同盟には、組合員を通し、未組織労働者をも奮ひ起たせ、反戦のあらゆるカンパニーに積極的に動員したのみ

ならず、組合政治部員を對支非干涉同盟の委員に送り込み、同盟と緊密な連絡を計り、同盟の確立に協力し、同盟の組織方針に基き、各組織労働者の末端に迄反戦の宣傳隊を置き、居留民保護の名にかくれたる出兵に絶對反對し、工場懇談會職場大會を開いて「支那へ一人の兵士も送るな!」「帝國主義戦争絶對反對だ!」「軍事費を一銭も出さな!」「軍事費で失業者を救へ!」「支那革命を守れ!」「ソヴェート・ロシアを守れ!」等のスローガンを工場内部に持ち込み、工場内に於ける労働の強化反對、賃下げ反對、時間の延長反對等の要求を結びつけて煽動し、帝國主義戦争の危機と徹底的に闘争いたしました。一度、對支非干涉同盟から、俺達の生き残の生きた眼を送れと、どしどし支持したのであります。これに驚いた××は、これに對して、徹底的に××を加へたのであります。我々はこれに對して直に、暴壓反對協議會を開き、抗議運動を捲き起しました。だが社會民衆黨のダラ幹、



宮崎龍介は、資本家のお使として、支那に渡り、居留民保護の美名にかくれた、××的出兵を合理化しやうとしたのでありました。

一九二七年十月下旬、私は都合によつて、東京合同労働組合の執行委員長に選出されました。それより以後は、一層眞剣になつて、日本共産黨並に、日本労働組合評議会の革命的指導を支持し、組合活動を積極的に、且つ活潑に遂行いたしました。

以上述べた如く、私の全生活課程が、入黨の全動機をなしてゐると言へませうが、特に、貧農の生活、工場労働の體驗とそして自らのこの悲惨な無産階級の地位から解放されたいといふ切實なる欲求と、帝國主義戦争に對する心からの憎悪とを以てその爲めの闘争の経験から、我々プロレタリアートを眞實に解放するものは、共産黨の指導の下に、飽くなき闘争を闘ひぬくより以外ないと考へ、且つ信じたからであります。一九二五年、かの川崎富士紡争議に於ける總同盟のグラ幹どもの裏切、隅田製練紛議の際に於けるグラ幹の取引等をはじめ大小争議の賣飛ばしや、組合戦線統一運動に於て、無産政黨組織に於て、工代會議運動に於て、對支非干渉運動に於て、我々労働者の眞實の利益の確保のために、吾が共産黨が先頭に立つて、共同闘争を持ちかけた時、それを拒否し反對し、デマを飛ばした奴等は誰だつたか、更に國際的に眼を移すな

らば一九一八年かのドイツ革命の際におけるノスケやシヤイデマン等のドイツ社會民主主義者どもは、カール・リブクネヒトやローザ・ルクセンブルグの革命的な指導者及び、多數の革命的労働者を虐殺したり、一九二五年、かの英國労働黨のグラ幹どもは、炭坑夫のゼネストを、軍隊までも出動せしめて鎮壓したり、インドの民族獨立運動を弾壓したりしてゐる。これ等の資本家のお先棒となつた社會民主主義者の國際的裏切團第二インタナショナルに對立して、鐵の如き組織と訓練の下に、あらゆる危険を冒して、命がけで闘ひつゝある國際共産黨、現實にプロレタリアートのかまやかしき勝利を示し、産業五ヶ年計劃による社會主義經濟の優越性を發揮し資本主義經濟を恐怖せしめつゝある所の、あの偉大なるソヴェート・ロシアの革命的労働者農民と、それを中心として、國際的に、強力に結び合つてゐる所の國際共産黨、即ち、コミンテルンのみが我々プロレタリアート解放の爲めに闘ふ處の組織であることを我々は自らの闘争の必要に應じて、これを認識し、日本共産黨はその一支部として、日本の労働者農民の解放と、朝鮮台灣その他植民地獨立のために決死的闘争をなしつゝある唯一の政黨なることを知り、一九二八年一月日本共産黨に加盟致しました。

私は入黨後も從來の労働組合運動を積極的に遂行しつゝ、又プロレタリアートの前衛として、前衛独自の闘争を行ひま

した。私は入黨以前既に、日本共産黨指導の下に、共産黨の政策を支持し、これを具體化する爲めに闘争してゐたことをこの公判闘争を通じて、法廷委員の代表陳述により尙ほ一層はつきりと知りました。日本共産黨は、日本プロレタリアートの頭腦であることが明瞭になりました。したがつて、日本共産黨の政策は、日本プロレタリアートの政策であり、日本プロレタリアートの要求は、日本共産黨の要求であると信じます。

#### ◇工場細胞活動

私は先づ、前衛独自の闘争から述べませう。だが一個人としてではなく、日本共産黨の一部としての細胞員として、私の所屬した所の細胞の活動を述べませう。一九二八年一月、入黨と同時に、私が所屬してゐた細胞は官業のある大工場でありまして、全従業員一千三百名、その内女工一千名、男工三百名ばかりあつて、全部通勤であります。この工場は賃金が非常に安く、女工の最低賃金七十五錢、男工の最低賃金一圓三十六錢といふのであります。この工場は震災で破壊されたといふ口實の下に、ひどいバラツクの假工場を使つてゐる爲めに、工場内がほこりで一ぱいになつてゐました。それだけでなく、埃がひどくて衛生上悪いのに、假工場ではたまたつたものではありません。丈夫な者でも、こゝの職工になると肺病にかゝつてしまふのです。その他の衛生設備の悪い

こと、長い押取する爲めに、安い賃金で退職手當を限られて働かせるといふからくりや、役付職工の制度を作つて、利己心を増長させ、團結を防止する手段を考へたり、職工判任官に拔擢するといふ千三ツのテレンテタや、これ等のいろいろの欺瞞政策の徹底せること等々、これ等すべて官業特有の労働者搾取の諸條件は具備してをりました。しかも、この工場の役人どもは、官業は國家の仕事だ、お前達は他の町工場の職工とは理が違ふのだ、お前達が一生懸命に働くことは、日本の天子様の爲めだとか、他の労働者の模範とならなければいかぬとか、國家事業の美名の下に、極度の搾取を行つてゐました。まづたく、搾取の上手なことに於て他の資本家のよき模範となつてゐました。

職工は職工として、一生懸命に働けばそれが、天子様に對して忠義の臣であると言つて搾取を合理化する位あくどいやり方はありません。

官業の労働者達が一生懸命働いて業績が上がつたとする。さうすると、その工場の役人どもは、經營方針が優良であるとか何とか言つて、ボーナスがウンと貰へたり、その上つた利益は國庫に入つて、資本家どもの税金減額に役立つ資本家どもは大喜びである。彼等は××をだしに使つて労働者を搾取してゐるのだ。したがつて工場には幾多の不平が捲起つてゐました。工場内には幾度か戰闘的労働者によつて労働組合が



作られやうとしましたが、いつも官業特有のガラ幹の蟠居するところとなり、労働者の切實な要求はいつもこのガラ幹どもに裏切られ組織は破壊されました。しかしそんなことで労働者の要求は消されるものではなく、さういふ情勢の下では尙ほ更ほんたうに決意ある労働者がぞくぞくと出る様になりました。この戦闘的労働者達は、當時労働階級の眞實の利益を擁護し、獲得し、プロレタリアートの解放の爲めに勇敢に闘つてゐた所の、日本共産黨及びその指導下にある日本労働組合評議會の指導の下に走つて來ました。我々は、これ等の革命的労働者を通じて工場内の不平不満を統一し、闘争を激發してこれを組織し、労働者の要求を壓殺する所の、官僚的ガラ幹、社會ファウシスト共を放逐するため、工場代表者會議運動に、對支非干渉運動に動員し、日本共産黨の強力なる基礎を作るべく我々は闘つたのであります。先づ我々は、工場内では、労働者の最も不平の中心であつた所の最低賃金問題を取上げて『同一労働に對しては男女工共最低二圓を支給せよ』と要求して闘つたのであります。

尙ほ共済會の自治化並に、工場にある最大の欺瞞的役割をつとめてゐる所の義済會の改善を當局に要求し、義済會の主要事業である所の食堂の改善、義済會より購求する所の日用品、米等の配達等の初歩的端初的要求を採り上げて闘争いたしました。

我は、日本共産黨のスコーガンである所の

△七時間労働制の實施

△賃金値下絶對反對

△健康保險の掛金資本家全額負擔

△資本家負擔による失業保險の即時實施

△團結種罷業權の獲得

△労働者を虐殺する帝國主義戦争絶對反對

△支那革命を守れ！

△労働者農民の祖國ソヴェートロシアを守れ！

△××制の廢止

△労働者農民の政府を作れ！

△労働者農民の獨裁

等のスコーガンを工場内の不平と結びつけてアジ、プロいました。その爲めにさしもの官業の工場内にも、各所各部に、職場懇談會、或は職場大會、職場代表者會議、従業員大會等が開かれ、勇敢に闘はれたのであります。

二月二十日の選挙日には「投票日を公休にし日給を全額支給せよ」と當局に要求し、その要求を獲得いたしました。

これを以てしても我々の闘争が如何に労働者の利益を守る爲めに闘はれたか、そして、それが如何に正しかつたかを雄辯に物語るものであります。

と。これは私の公判廷に於ける陳述のコースの概略である、

我々は更に、工場新聞を發刊し、工場内のあらゆる日常闘争の宣傳煽動の機關とし、組織者として百パーセントにこれを活用し、日本共産黨の政策を労働者の中に浸透せしめるやうに努めました。この工場新聞は工場労働者のよき友となり最大の味方となつて、直接に労働者の利益を代表してゐた、更に、モリ／＼とむさぼり讀まれました。

更に、この工場には、女工が多いので托兒所が有りましたが、こゝも設備が不完全である爲めに、托兒所に子供を預けておけば健康兒も病兒も一緒である爲めに、健康兒は他の病氣に感染し、病兒は尙ほひどくなる。そんな所で大事な大事な可愛い子供達を安心して預けておけない。そこで母親は作業中も子供の心配があるから自然仕事の能率が上らない。それだから賃金が澤山とれない、怪我をする率が多くなる。そればかりではない、授乳時間といふものがない。普通の職工と同一に搾取され、同じ休憩時間に授乳しなければならぬのでその爲めに女工達の間に不平が起つてゐました。我々はこの女工の不平を取上げ、

△托兒所の衛生設備を完備しろ！

△保婦を三名以上に増加しろ！

△授乳時間を二十分特別に與へろ！

等の要求をかゝけて闘つたのであります。

又我が國第一回の普通選挙の所謂總選挙開争の際には、我

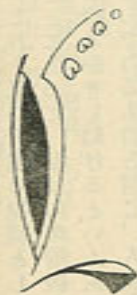
が、今になつて考へて見ればこの陳述は多分に左翼的粉飾がある、だが兎も角この様な危険な過激な思想を懐いてゐたのであつた。私はこのやうな奇激な思想を、私の歴史的使命感として意識し、これを私の行爲の規範としたのであつた。これを闘ひぬくことによつて、私は無産階級を悲惨な生活から解放し、強きを挫き弱きを助けるといふ正義心に基き、自分が正しき道を歩んでゐるものと信じ、人類をして眞に平和な社會に楽しく生活させることが出来るのであると信じ、私の理性と感情と意志との一切を統合して決意し、日本共産黨に加盟し、その活動に積極的に参加し、日本共産黨の爲め、延いては國際共産主義運動の爲めに一命を捧げて活動する決心で居つたのであります。これは全く誇張でも虚偽でもないまつたく偽りない私の告白である。それだけに、私にとつては、法華經にめぐり合つた時の異常な感激は、何と譬へていいか解らない。實際一命を捨てても何等悔ゆる所がないとまで信じてゐた共産主義が、社會科學としての理論はともかくも、かの認識論たる唯物辯證法は、法華經方便品の釋尊の認識論たる如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等の十如に遙かに及ばず、その運動とその手段に於て、まつたく人類の究極の幸福と平和とに一致しないことに氣が付いた時、私の眼は、慚愧の涙で一杯であつた。私の胸は悔悞の傷手でかきむしられ



るやうであつた。しかもどうであらう。私自身が研究の結果創見したのではなく、今まで無智な老婆と哀れんでゐた私の母が、死ぬ程の思ひをして祈りに祈り聞かせた、南無妙法蓮華經がこの宇宙の中の最上の真理であつたのだ。私の母が、この經解、希有第一最尊の妙法蓮華經の真理を、眞に理解してゐるかどうかは私は知らない。だがその純眞な信念に於て少女の如く清く、強固な信仰に於て金剛の如く固く、宗教的な方面から言ふならば、私の母はまったく眞實の寶珠を把みそれを固く守つてゐるのである。私は母の熱愛と、信仰と法華經の法力とによつて、私の思想的轉向ははじまつたのである。

私の思想的轉向は法然上人や、親鸞上人の自力から他力への轉向位な生やさしい轉向ではなかつたのである。私の前には、今二つの双が並んでゐる。かつては、白色テロルが私の生命をねらつてゐた様に、今は赤色テロルの双が裏切者として、私の首をねらつてゐることであらう。さうだ事實、死を誓つた血盟の同志を後にして、私は阿片と言はれる宗教の中に走り、しかもこの宗教の社會性を、久住ならしめんが爲めに戦ふことを私の眞使命として決意するに至つたからである。正しき道に生きんと常に願つてゐる私にとつてそれは已むを得ないことである。何れにしても、一度は死ななければならぬ人の生命である。眞理を愛する私にとつて、最善の道は爲

めに一命を捧げやうといふ決心は、今にはしまつたことではない。この決意は私にとつては、既に二十歳の春、かの一燈園生活に入つた時から出来てゐたのである。私はそれ程眞理に憧れ、求めてきたのであつた。今私は、法華經に於て、宇宙の究竟の大眞理を知ることが出来たのである。それから以後の私は、まったく眞劍になつて、佛敎經典、特に、法華經の研究にとりかゝつたのである。こん度は、私自身の生きる爲めに、宇宙の大眞理を把みたいが爲めに、一心に身に徹する思ひをもつて讀經をはじめたのであつた。私は今をはじめてほんたうに、自己の本質が把めたやうな氣がする。日本が生んだ最も偉大なる聖者、日蓮聖人の思想に觸れるや、私の國體觀、國家觀、世界觀乃至宇宙觀はまったく別なものとなつた。



# 法華經講話

(第三十講)

小林一郎

## 妙法蓮華經譬喻品第二(其二)

昔より來佛敎を蒙りて 大乘を失はず

佛の音は甚だ希有にして 能く衆生の惱を除きたまふ

我已に漏盡を得れども 聞きて亦憂惱を除く

(昔來蒙佛敎、不レ失於大乘、佛音甚希有、能除衆生惱、我已得漏盡、聞亦除憂惱)

私共は本當に考へて見ると、昔からこのかた佛の敎を習つて居つたのだが、それは小乘の低い敎だとはかり思つて居つた。ところが其の習つた事が實は『大乘を失はず』で、佛に成るといふ道に役に立つて居つたといふことに今氣が付きました。高い方の

敎を聞いて見ると、低い敎が役に立つたといふことに氣が付きます。低い所ばかりやつて居つたのではつ支らないと思ふ。高い所まで行つて見ると、『ア、あの低い所に力を入れて居つた事が本當に役に立つのだ』と思ふのです。だから自分達はもとから佛様の敎を習つて居りましたが、今改めて佛様の敎を聞いて見ると、皆これは自分達が佛様と同じさどりを聞くことに役に立つて居るといふことが解りましたといふのです。

佛様のお言葉は甚だ稀にしか聞けないものであります。其の佛様のお言葉はよく衆生の心の惱みを除いて下さる。自分も前から佛の敎を聞いて、『已に漏盡を得れども』漏といふのは迷ひのこと、こゝ



では極く低い方の世間的の迷ひを取り除いたことを漏盡といふ。それから更に佛の高い方の教を聞いて一層の悦びを感じて、心の憂ひや惱みを除くことが出来た。

我山谷に處し 或は林樹の下に在りて

若は坐し若は經行して 常に是の事を思惟し

嗚呼して深く自ら責めぬ 云何ぞ自ら欺ける

我等も亦佛子にして 同じく無漏の法に入れ

ども

無上道を演説すること能はず

未來に於て

(我處ニ於山谷一 或在ニ林樹下一 若坐若經行 常思惟是事一 嗚呼深自責 云何而自欺 我等亦佛子 同入ニ無漏法一 不能於未來一 演説無上道也)

ところが自分達は初めからさういふ教を學ばなかつたものですから、山や谷に居つたり、或は林や樹の下に居つて、或は坐つたり、或は經行といつて、

た。無量義經にもあります、法華經には時々出て来ますが、吾々が心の奥の方で求めて居ること、これは自分には解らない。しかし佛様は見透して居らつしやる。だから自分達は佛の小乗の教を聞いて、それで覺つたと思つて安心して居るつもりだが、心の奥の奥には佛性があるのだから、どうもこれではまだ足りないなといふ心持が起つて居る。それが自分で解らない。何だかこれで良いやうな氣もする、また自分の力ではこれでおしまひだと思ひながら、心の奥からは、どうも同じお弟子でありながら此の邊で止るのはつまらないなといふ氣も起つて來るといふ。此の「深心の所欲」といふ言葉は非常に面白い言葉です。私共は「人はどうでも俺さへ宜ければ」と一應は思つて居りながら、やはり人と一緒に喜びたいといふ心持が、心の奥からこみ上げて來て居る自分で自分の心持が解らない。それを佛様は見つて居らつしやる、「彼奴はあすこで止まるナンどいつて

そこら歩きながら、佛様から伺つたことをいろいろ工夫しながら、いつでも斯う思つて居りました。それはどういふことかといふと、自分達はマア、機根の低い者だから、自分一人の心の惱みを除きさへすればそれで宜いのだと思つて居りました。さうして自分で自分を責めて、自分達は程度の低い者だから、到底佛様と同じやうなものに成れやしないと思つて、何故自ら欺いて居たかと悔んで居た。何故大きい望などを立てたのだらうと思つて自ら悔んだこともあつた。自分達も佛様のお弟子であるから、「無漏の法」といつて、自分一人の心の迷ひを取り除くやうな教は習つたけれども未來に於て「無上道」といふ、佛の教を世に弘めるやうな道を習ふ力はなと考へて悔んで居つた。ところが其の悔んで居つたことが、間違ひであると、今日只今佛様の御説法を伺つて氣がつきました。斯う舍利弗が申した。これは前に「深心の所欲」といふことがありまし

居るけれども、ナーニあすこで止まるのではない、モット先まで行くものだ。佛様はズット見透して居らつしやつて、時機が來れば大乘の教を説いて、自分達をその所まで引張つて下さる。自分達はそれを知らないから、途中でグズグズ言つて悔んだり。悲んだりして居つたが、今考へれば羞かしいことだ斯ういふことを舍利弗が打明けて申すのであります。實際は私共はいつでも自分で自分を知らないで居るものですから、佛の教のやうな高いものに寄り絶ることによつて初めて自分で自分を知ることにもなるこれは始終考へなければならぬ事でありませう。舍利弗も自分はさういふ心持で、折角佛門に入つて佛のお弟子になりながら、佛様の教を世に弘める大きな務めを果すことも出来ないのかと悔んで居つたが其の悔んだことが愚であつたといふことに今日初めて氣が付き、さうして何とも言へない歡喜を感じましたと斯う申上げたのであります。



此の譬喩品の初めの偈のところで、舍利弗は、自分の今までの考への足らなかつたといふことを述べて、佛様の教に歸依する者は、結局皆大乘の教を學んで、佛様と同じやうな徳を具へるやうになる事を理想としなければならぬといふことが、今方便品の御説法を伺つて、初めてわかつたといふことを述べました。實は今まであまり深い教を聞かなかつたものでありますから、何しにお釋迦様のお弟子になつたのか自分でもわからぬといふ、物足らないやうな感じもしたと申して居ります。自ら責めて、どうして自分で自分を欺いたかと思つた事さへある自分で自分を欺くといふのは、自分が初めお釋迦様のお弟子になつた時には、どんな事でもわかると思つてお弟子になつたのであるが、暫く経つてもなかなか深い事は教へて下さらぬ、さうして見ると自分の的がはづれた。どうも詰まらぬ事をしたナと思つて後悔した事などもあつたといふのであります。

金色三十二

同じく共に一法の中にして

而も此の事を得ず

(金色三十二 十力諸解説 同共一法中 而不得此 事一)

「金色三十二」といふのは佛様のことです。佛様には三十二相といふものがある。それはつまり心の中にある徳が、自ら相に現れることを言ふので、必ずしも三十二と限らないでも宜いのであります。これは佛教ばかりではありませぬが、印度の昔からの習慣として、物が揃ふといふことを言ふのに八の倍数で言ふことが多い。八といふのは、自分を中心にして考へると、前と後と右と左で四つ、その隅を入れますと八つになる。それで八といふのは物が揃ふといふ意味になります。ですから物を八で算へるといふことは揃ふといふ意味で、必しも數字に囚はれなくても宜いのです。法華經を八巻にしたのも實は

これはこの時になつて始めて前の心持を打明けた譯でありませう。

所が今お釋迦様の仰しやつた事をよく伺つて見ると、決して佛様は自分達を見捨て、居らつしやるのではなくて、以前の自分はまだ一程度が低かつたから深い教を説かれなかつたので、今日になつて見れば本當の心持を打明けて説かれるのだ。さうして見ると前には自分がまだ力が足らなかつたのであつて、佛様のお慈悲が足らなかつた譯ではなかつたのだ。前に自分が後悔したことは間違つて居つた、やはり有難い事だといふことが本當にわかつた。これから後になつても「無上道を演説すること能はず」佛様のお覺りになつたことを人に向つて語るナンといふことは出来ないだらう。要するに自分達はいつ迄も低い方の教で甘んじて居なければならぬのかナといふやうに悔んで居つた。是れからその言葉の細きであります。

十力諸の解説

同じく共に一法の中にして

(金色三十二 十力諸解説 同共一法中 而不得此 事一)

さういふ意味です。すべての事が皆この中に揃つて居るといふやうな意味を表はさうと思つて、後世の人が法華經を八巻に分けたのであります。印度の思想で言ふと、凡て八といふのは物が揃ふといふ意味になる。ですから八若くは八の倍数で物を考へることが多い。佛様のお像でも八の倍数の寸法で造る八寸とか八尺とか、或は八の倍数の一寸六分とか、一尺六寸とかにする。大きい佛像を造る時には丈六の像といつて、一丈六尺にしますが、やはり八を二倍した數であります。だから三十二相といふのもやはり八の倍数で、なんでも八の倍数といふのは物が揃ふといふ意味になります。三十二相が揃ふといふことは、つまり身體のすべての點に於て美しい相が皆現れて居るといふ意味に取れば宜しい譯です。金色といふのは身の光が周圍を照すといふので、佛のお相を仰ぎ瞻る者は皆光に照されたやうな氣分になりますから、それを形容して言つたので、金色三十



二といふのは佛様のことで、十力のごとは前に一度申しましたから略しますが、要するに佛様の具へて居らつしやる様々な力です。教を世に弘めたり、人を感化する力を十の點から算へたものです。

「諸の解脱」、此の解脱といふのは迷ひを離れることで、その迷ひを離れるにも様々な途がある、斯ういふやうなことが佛様には具はつてあるのに、自分達は共に同じ佛の教を習つて居りながら、「此の事を得ず」といふのは、今の十力とか三十二相といふことには一向縁が無かつた。自分達とは全く別な事のやうになつて居つた。實に残念なことであると言ふのであります。

### 八十種の妙好

### 十八不共の法

### 是の如き等の功德

### 而我皆已に失へり

(八十種妙好 十八不共法 如是等功德 而我皆已失)

「八十種の妙好」といふのは、三十二相を又細かに

この三つが一つの類になつて居ます。身に行ふ事に過失が無いのと、口で言ふのに過失が無いのと、意に念ふ事に過失が無い。吾々共は凡夫ですからいろいろ間違ひがある。佛様になれば、身に行ふことに一つも間違ひがない、一々の行ひが完全である。口で仰しやる言葉にも少しも間違ひがない。心にお考へになることでも、いつでも物事を充分に考へられて少しも間違ひがない、斯ういふことであります。

### 四、無二異想

### 五、無三不定心

### 六、無不三知已捨

これが又一つの類でありまして、「異想無し」といふのは異つた考へを有たないといふこと。佛様はすべての人を救うてやりたいといふ考へだけ有つて居らつしやる。他の考へは少しも有たない。私共はさう行かぬ。人の爲に親切に計つてやつても、又時

分けたもので、畢竟同じ事でありませぬ。例へば顔な顔の相を三つか四つで説明して居るのを、又細かに分けて六つか七つにしたので、三十二相といつても八十種好といつても同じです。佛様の美しい相のことでありませぬ。

「十八不共の法」これは非常に數が多いやうですけれども、分類して見るとさう大して面倒なことではありませぬ。「不共」といふのは共にせざるこゝろで、「佛でなければ他の者はなか／＼その仲間入の出来ないやうな」といふ意味です。「法」といふのは此處では事柄といふ意味で、教といふ意味ではない。佛のみ具有せられるところの十八の特色でも申しませぬ、さういふやうな意味に取つたら宜しい。大體類を分けて一通り説明して見ますと、

- 一、身 無失
- 二、口 無失
- 三、念 無失

時「これ程親切にしてやつても禮を言はないから馬鹿々々しい」とか、「こんな事をやつても追ひつかない」とか、いろいろ餘計な考へが起きて来る。所が佛はモウ一切の人間を救はうといふお考へばかりであつて、それ以外の異つた考へは起つて来ないといふ、洵に尊いことであります。それから「不定心無し」で、定まらない心持といふものは無い。いつも心がチャンときまつて居る。自分は人を救ふ爲に世に出たのだから、どんな難しい事があつても其の働きは變らない。場合によつてグラ／＼する心持といふのは少しも無い。これも私共にはなか／＼出来な。私共はいろいろな決心をするけれども、あまり難しいと。又出直さうかと思つたり、止めようと思つたりして、心が兎角動搖する。その無いのが無不定心といふことです。それから「知り已りて捨てる無し」これがなか／＼難しいのであります。知り已つて捨てるといふのは、世の中の事をよく知



つて、さうして要らないことは止めてしまふといふことです。一身の利害得失を考へるとか、地位とか名譽とか勢力とかに心を惹かれることは一切無いのです。これは難しい。私共は好き嫌ひがあるから好きな事には執著して好きでないことはない、加減にしなければ、これではいけない。知り已つて、世の中のことにはスツカリ能く知つて、善いも悪いもスツカリ見分けてその中で詰まらぬ事は皆止める。斯ういふのが知り已つて捨てるといふことです。知らないで何だか危いから止すといふのは、誰でも出来ることでありますけれども、それではいけない。本當に世の中を知つて、スツカリ知り已つて、世間の人情もスツカリ知つて、その中で要らないことは捨て、しまふ。してならぬ事は止めるといふことでなければならぬ。佛様は知り已つて捨てない場合はない。いつの場合でも世の中の事をスツカリ知つて、さうしてその世の中の事の中に於て、つまらぬ事は皆止めてしまふのです。

- 七、欲無減
- 八、精進無減
- 九、念無減
- 十、慧無減
- 十一、解脱無減
- 十二、解脫知見無減

これが一つの類でありまして、「無減」減すること無しといふのは、途中で減ることはないといふ意味です。その途中で減らないといふ事に六つある。先づ「欲」といふのは、希望とか乃至は理想とかいふやうなことです。普通には欲といふ字は悪い意味に、例へば金が欲しいとか、物が欲しいとかいふ時に使ひますけれども、この場合の欲はさうでなくて自分が永い間に、是だけの事を是非したいといふやうに望むことであります。所謂理想であります。その理想が途中で減退することは無いといふ、これ

が「欲無減」です。これもなか／＼難しいことで、私共は若い時にはいろ／＼理想を立てたけれども世の中に立つてうまく行かないと減退さしてしまふ。初めは總理大臣になりたいといふやうなことを理想にする。所が世の中に立つて見ると、「イヤ、もう局長になれば宜い」……初めは百萬圓儲けたと思ふ、所が百萬圓は儲かりさうもないと、「十萬圓でも宜い」、「イヤ三萬圓でも宜い」、「千圓でも宜い」……だん／＼吾々の理想といふものは低くなつてしまふ。それは自分に其の力が無いからである。だから初めは偉い理想を立てるけれども、だんだん難しいといふので理想が低下してしまふ。それが無いといふのが所謂欲無減です。佛様はどうして一切の人間を救ひたいといふ理想を立てられる、その理想が途中で低下するといふことはない。これは非常に貴い事でありませう。普通の人間ではいつても理想は半分になつてしまふ。吾々のやうに白髪で

も生えて來ると、「どうも世の中は思ふに委せない」「マアこの邊で止めて置け」といふことになる。併しそれでは本當の事は出来ない。佛様はその理想が途中で減るとか、途中で下るといふことはない。どうしても一切の人間を救はうといふ理想を以て、どんな時でも努力される。斯ういふのが、欲無減といふことであります。

それから「精進」といふのは幾度も申すやうに、自分のすることに一切の力を籠めて、他の事に心を惹かれないで、いつでも同じ所に向つて、行くといふ、これも難しいことです。私共は一つ事を一生懸命にやつて居るが、暫く経つと所謂世間で言ふ三日坊主で、ツイ弛んで來る。早起をしなければならぬといふので、五時に起きたのは宜いけれども、二三日経つと、「モウ大分日が短くなつたから六時にしよう七時にしよう」といつて、精進が續かない。熱心にやる事が續かずに、後になると熱心の度が減



つて来る。それではいかぬ。精選といふ心持、熱心に一つの事に打込んでやるといふ考へが途中で減らないことが肝要で、それが「精選無減」であります。それから「念無滅」は善い事を心に覺えて居つて忘れないこと。念は憶念するといつて、心に覺えて居ることです。佛様は、心に覺えて居ることを途中でいゝ加減にするといふことはしない。吾々は却々さう行かない。覺えて居る事があつても、後から後からいろ／＼な事があるから、先に覺えた事を忘れてしまふ。大事なことをツイ忘れたりする。さういふ事の無いやうに憶念することが必要で、心に覺えて居る事はいつまで経つても同じやうにハッキリして居る。それが念無滅です。

それから「慧無滅」佛様は御自分の智慧といふものが途中で衰へるといふことはない。普通の人間は年を取るとだん／＼智慧が衰へて、物事がわかつたり、わからなくなつたりする様になる。佛様の智慧

い事をしない。自然に正直にして居る。併し別に誇るべきことではない。悪い事をする機会がないから悪い事をしなかつたのだから、さういふ機会があれば又悪くなるかも知れない。自分が正しいといふ自覺を以て正しい事をするのが、これが非常に大事です。それが知見といふことです。自分が世間の迷ひを離れて居ると共に、その離れて居るといふことを自ら知見して居る。自覺して自分でよく知つて『どうぞこの世間を離れるといふ行ひを續けたいものだ……これは決して途中で止めてはいかぬと、斯ういふ覺悟を以てやる。其が解脱知見といふのであります。無論善い事をするに越したことはありません。けれども、併し善い事をしながらその價値がわからなくて、たゞ習慣でやつて居るといふのは危ない。佛様は少しもそんなことはない。世間を離れた善い行ひをして居ると共に、その善い行ひの價値といふものを始終自分で辨へてやつてゐらつしやる。それが決

といふものはいつても完全であつて、その智慧が衰へることはない。

それから「解脱無滅」、解脱といふのは、世間の名利等の欲をスツカリ離れることで、その離れ切つた状態が少しも變りがない。再び元の状態に戻るといふことが決して無いのです。

それから「解脱知見無滅」、こゝに解脱と解脱知見と二つ算へてあるのは非常に面白いので、解脱といふのは自分が世間に囚はれない心持を有つて居ること。解脱知見といふのは、自分の世間に囚はれない行ひは間違ひがないナと自ら信すること。これは人間の實行の上に於て極めて大事なことでありまして、凡て善い事をするのに、善いと信じて善い事をするのでなければ本當ではない。習慣的に善い事をしたのでは頼もしくない。世間によくさういふ人がある。遠い田舎か何かで、都會の事をまるで知らな

して途中で崩れたり、衰へたりすることはありませぬから「解脱知見無滅」といふ。この「無滅」といふことが六つありまして、佛様の行ひの中の重要な箇條であります。

十三、一切身業隨智慧一行  
 十四、一切口業隨智慧一行  
 十五、一切意業隨智慧一行

是れが又一つの類で、「一切身業」、即ち一切の身に行ふことは皆「智慧に隨つて行ふ」。智慧に隨つて行ふといふのは、何でも宜い加減にやるのでなく、一切自分の身に行ふ事といふものは皆深く思案して、正しい事だ、善い事だと斯う突き止めてから行ふ。それが智慧に隨つて行ふといふことです。「一切口業」、即ち一切の口で言ふ事が出鱈目に口を辻



で、皆智慧に随つて正しい事ばかりを意の中で思ふといふのであります。

十六、智慧知過去世無碍

十七、智慧知未來世無碍

十八、智慧知現在世無碍

その次に「智慧をもつて過去の世を知ること無碍なり」「智慧をもつて未來の世を知ること無碍なり」「智慧を以て現在の世を知ること無碍なり」これは同じやうな言葉であります、自分の智慧をもつて過去の世の事がスツカリわかる。これは佛の智慧であればさうでせう。又未來の世、これから後の世が斯うなるといふこともスツカリわかる。それから現在の世の相といふものが皆よくわかる。無碍といふのは自由自在、少しも障ること無し徹底的にわかるといふのであります。

以上十八のことは佛にして初めて具へられる事でありまして、佛以外の者はなかく斯ういふ事をス

ツカリ完全に具へるといふ譯に行かない。併しながら私共は、佛の通りになれないからといって失望してはいけないので、これに比べて自分の足らない所を反省して、一つでも二つでもこれに近いやうにやつて行けば宜い譯でせう。これが十八不共の法と言ひまして、他の者は佛と一緒に言ふことの出來ない完全な行ひだといふのです。

『是の如き等の功德』以上擧げたやうな善い行ひをする力といふものが吾等には具はらぬ。どうもお釋迦様のお弟子になつてから十五年も二十年も経つけれど、斯ういふことが自分達に實行の出來る見込もなかつた。斯う思つて實は失望して居つたといふのであります。

我獨り經行せし時

佛大衆に在して

廣く衆生を饒益したまふを見て

自ら惟はく此の利を失へり  
我爲れ自ら欺誑せりと  
以て世尊に問ひたてまつらんと欲す

爲めて失へりや爲めて失はずや

(我獨經行時 見佛在大衆 名聞滿十方 廣饒益衆生 自惟失此利 我爲自欺誑 我常於日夜 每思惟是事 欲以問世尊 爲失爲不失)

自分は何りで「經行」といつて道を靜かに、歩きながら佛様の教に就て考へた時に、佛が眞の覺りをお聞きになつて、そのお名前は十方の世界にも遍く聞え、廣く大勢の人間に救済を興へ利益をお與へになつた有様をよく知つて居つた。さうしてその佛様の偉いのに比べると、自分達は洵につまらないものであるから「自ら惟はく此の利を失へり」と思つた。佛様のやうにあんなに大勢を教ふといふ力を自分は到底持てない、佛と自分とは非常に距離がある

斯う思つて、自分で深く考へて自分が嫌になつた。自分は初めお釋迦様のお弟子になつた時には、餘程偉いものになるつもりだつたけれども、いつ迄経つても佛様と斯んなに段が違つて居るならば、自分で自分を誑いたのである。自分が少し思ひ過しをしたと思つた。「ナカ／＼これはいかぬナ」と、斯ういふ風に思つて、實はガツカリして居りました。ですから夜も日も常に斯ういふことを考へて、佛様のお弟子になりながら、この邊で止まるのでは一向張り合ひがないナといふことを思つて居つた。

それで或る時には佛様に伺はうと思つて居つた。自分がモウこの邊で終つたのだが、これは失敗でありませうか。それとも縦ひ偉くなれずとも、少しでも教を聞いたならそれだけ宜いので、矢張り自分には得てありましたらうか。『自分の今までの境界は失敗でせうか、それとも失敗でないでせうか、どちらに考へたら宜しからうかと思つて、自分でも思ひ惑



うて居りました。

我常に世尊を見たて

まつるに

是を以て日夜に

今佛の音聲を聞きた

てまつるに

諸の菩薩を稱讚したまふ  
是の如き事を籌量しき

宜しきに隨ひて法を説き  
たまへり

無漏は思議し難し

衆をして道場に至らしむ

(我常見世尊、稱讚諸菩薩、以是於日夜、籌量如此事、今聞佛音聲、隨宜而説法、無漏難思議、令衆至道場)

ところが又佛様が觀世音菩薩とか文殊師利菩薩といふやうな菩薩を始終お稱讚になり、さうして「菩薩達は偉い」と仰しやつて、自分達のことはいふ少しも讃めて下さらない。(此處はさういふ意味が籠つて居るのであります)だから夜も日も斯んな事ばかり考へて居つて、吾々は逆も駄目なのか知らん、あの菩薩達は始終讃めて下さるけれども、吾々は少しも

讃めて下さらない。自分達は佛とはまるで段違ひだ斯う思ふと何だか寂しくなつて来て、たゞ悔んで居りました。所が實はさうではないので、今日佛様の教を親しく聞いて見ると、佛様といふものは宜しきに隨つて法をお説きになるので、相手次第で淺くも深くもお説きになるのだから、自分達の修行が或る所まで行けば、自分達に對しても菩薩に對するのと同じ事を説いて下さるのでいふことが今日になつて能くわかつた。だから要するに自分達の奮發次第である。佛様が教を惜む譯ではない。併し吾々の力が足らなければ、深い教を説いてもいけないから、説かずに居らつしやるので、佛様が不親切な譯ではない、吾々の力が足らなかつた。いつでも力相當の教を説いて下さるのだから、こちらが佛に近いものにさへなれば、佛様は萬事打明けてお説き下さる、斯ういふことがわかりました。

「無漏は思議し難し」で、迷ひを無くしてしまつた

状態といふものは、普通の者にはチヨット見當が附かない。それは實際さうです。山の下に居て山の上の事はわからない。どこ迄行けるか、何が上の方にあるか全くわからない。だから自分達は、佛様に成ればもうスツカリ迷ひが無くなるのだといふことは聞いて居るけれども、その迷ひが無くなるといふのはどんな状態なのか、これは自分達には見當が附かない。併し今日になつて見ると、佛様が吾々を引連れて皆佛の境界へ向つて進んで行かせたのだといふことが分つた。それで「道場に至らしむ」で、道場とは佛の覺りを開かれた場所です。結局は私共も佛様の覺りをお聞きになつた場所に行つて、佛と同じ覺りに入るやうにして下さるのだといふことが今日初めてわかつた。そこで初めてホツと息を吐ひて非常に喜んで譯です。「衆をして道場に至らしむ」といふのは深き感謝の言葉であります。釋尊のお弟子の中には力のある者も無い者もあるけれども、「衆」

といふものは其の凡てをいふので、其のすべての人を道場といつて、佛様御自身が覺りをお聞きになつたその場所に連れて行つて下さる。言ひ換へれば佛の境界に皆到達さして下さる。斯ういふのでありますから、今迄自分達は悔んで居つたけれども、その悔んだことは自分が愚であつたといふことに氣が附いたのであります。

さうなつて佛様の廣大無邊なお慈悲がわかりましたから振返つて見ますと、急にこんな事を教へて下さらなかつたのも無理はなかつたと氣が附いた。兎角人間といふものは急ぐものです。「お前は子供だ」と言はれると、大人の仲間になりたがる。「お前は此の邊で宜からう」と言はれると、モット上の方をやりたい。だから小さい子供を見ると飽くわかる。五つ六つの子供がお母さんの下駄などを履いて外へ出る子供だから、子供の下駄を買つてやつてあるのに、小さい下駄を履かないで、態々大人の下駄を履



出て出る。馬鹿な事をすると思ひますけれども、子供だ／＼と言はれるとチョット不愉快で大人の眞似をして見たい。それと同じことで『お前はこの邊をやれ』と言はれると待ち遠だから、モウ少し上の方を早くやりたい／＼といふ氣になつて来る。けれども教へる方では能くわかつて居る。子供は小さいから小さい下駄を履かせる、大きくなれば大きい下駄を履かせる。それと同じやうに、力が低ければ低い方の教を與へる、だん／＼わかつて来れば上の方を教へる。所が習ふ方では待ち遠しいから、『いつ迄こんなことをやつて居つても仕様がな、どうしたのだらう』斯ういふやうな氣分が起る。此の處は能く人情を盡して居ります。自分達はモウ永い間佛のお弟子になつて居るが、所謂菩薩といふやうな人々が大變に深い教を聞いて、又それがわかつて佛様に讃めて戴いた事などを見ると羨しくして仕様がな、『逆も自分達はあゝならないのか、馬鹿／＼しいナ

と思つて居つたが、實は自分の方が駄目だったので自分の方が相當になればやはり大人の扱ひをして下さるのだといふことが今日わかつた、斯ういつて喜んだのであります。

これは洵に私共には良い教訓でありまして、私共が修行するのにも二つの癖がある。一つは怠けるといふこと、一つは急ぐといふことで、これは兩方ともいけない。急いでも一足飛びには出来ない怠けないで、急がないで、一歩々々と堅實にやつて行かなければならぬ。その所がどうも難しいのであります。その事が此處に能く教へられて居る。相當な所まで行けば佛様は自分にどんな深い教でも説いて下さるのだから、今よりは自ら安んじて大乘の教を學ぶ氣になり、大乘の教を學んで菩薩の行を積んで行くべきものだ。斯ういふことが能くわかつた譯です。

世尊我が心を知しめして

邪を抜き涅槃を説きたまひしかば

我悉く邪見を除きて

空法に於て證を得たり

爾の時に心に自ら謂ひき

滅度に至ることを得たりと

而るに今乃ち自ら覺りぬ

是れ實の滅度に非ず

(我本著邪見、爲諸梵志師、世尊知我心、拔邪說涅槃、我悉除邪見、於空法得證、爾時心自謂得至於滅度、而今乃自覺、非是實滅度)

そこで舍利弗が自分の過去のことを振り返つて見た舍利弗は元婆羅門の教を奉じて居つた。佛敎の起る前は婆羅門教でありますが、その婆羅門の教を奉じて居つた。この人は非常に頭腦の良い人だつたもので、それから、婆羅門教を研究して、忽にして上達し、獨立して教を説くことを許された。自分の弟子が三百人も五百人も出来た。ところが婆羅門の教ではないといふことに氣が附いて、それからお釋迦様

のお弟子になつた。自分がお釋迦様のお弟子になると共に、元自分の弟子であつた者を集めて、『今まで自分は何もわからないのにお前達の先生となつてお前達を欺いて濟まなかつた。併し今度自分は釋迦牟尼といふ偉い先生を見附け出したから、お前達も自分と一緒にお釋迦様のお弟子になりなさい』と言つて、弟子達を皆引連れて佛門に歸依したといふ美談があります。その事を舍利弗が自ら言ふのであります。

自分は本邪見に執著して、本當の正しい考へを有ちませぬで、梵志の師となつて居りました。『この梵志』といふのは今申した婆羅門のことです。梵は淨いといふ意味です。世の中を離れて山住居などをして、世間の欲を離れて生活をして居つたものですか、その人々のことを世間では梵志と言つて居つたつまり婆羅門教の信者であります。その婆羅門教の信者の先生となつて、不完全な教を長い間研究もし



又人にも説いて居りました。そこで佛様は私の心がさういふ風に不完全な状態だといふことを御存知で「邪を抜いて」その正しい道に合はぬ心持を打破つて「涅槃」といふ覺りの道をお説きになりました。私共は佛のお弟子になりました。悉く前の間違つた考へを取り除きまして「空法に於て證を得たり」空法といふのは世間を離れた考へのごとで、いはゆる無差別平等といふやうな、實世間を離れ盡した教それが空法であります。さういふ教をだん／＼學んで、「さとり」を得たといふのであります。

これは前にも申しましたが、眞にさ、さるといふのは、「有」「空」「中」といふ三つの段を通つて來る。

「有」——世間——差別  
 「空」——出世間——平等  
 「中」——度世間——中道

一般の世間の人の考へは「有」です。有といふの

は差別のごとで、世間の人は差別にばかり囚はれる普通世間で佛教も神道も何も知らないで、暮して居る人の考へといふものは有であります。世間の人は何事につけても差別ばかり考へて居る。金があるとか無いとか、身分が高いとか低いとか、儲かつたとか損したとか、勝つたとか負けたとか、皆差別です。差別より外に何も考へない、それが世間普通の考へ方です。それもまるで嘘ではないけれども、そればかりに囚はれてはいけません。だから儲かれば喜び、損すれば失望する。勝てば心が驕るし、負ければ落膽する。それは所謂差別ばかり考へて居るからであります。

それから今度は世間を離れた考へで行きますと、「空」になる。それは出世間といつて、世間を経て軽く見る考へ方で、その場合に於ては平等を主に考へる。ナニニ金があつたつて、無かつたつて同じ人間ぢやないか、勝つたつて、負けたつて似たものぢや

ないか、儲かつたつて、損したつて結局似たものぢやないか。斯ういふやうに世間を離れて、何でも同じだ／＼といふ風に考へが向いて行く。これが一步世間を離れた考へ方で、これは前のよりは宜しい。勝つて驕り負けてガツカリするといふよりは、勝つても負けても驚かないといふ方が宜いに相違ない。これは前のより一段上です。

けれどもさういふ方だけ考へたのでは世の中を救ふことが出来ませぬから、そこで更に進んで「中」といふ考へ方でなければならぬ。世間でもなければ出世間でもない。出世間の心持を以て世間に居る。世間に囚はれない心持を以て世間の人と共に住む。さうして世間の人を教へ導いて行く。これが世間を度する人の態度です。物は異ふといへば皆異ふけれども、併しその中に一貫して異はないものがある。

併し平等だ／＼といつて人間皆同じだと言ふのはそれは空想だから、所謂中道といつて平等にも差別に

も偏せぬ道を自分が實行して、さうして世間を導いて行く。自分は世間の人間と一緒に住んで居りながら世間の人を教へ導いてこの世の中を良くして行かうといふことを考へて居る。所謂大乘の教を學ぶとか、菩薩の道を勵むとかいふことは即ちその「中」を實行する譯であります。しかし順序でありますから、世間に囚はれて居る心持を一度離れ、空といふ世間を全く離れた平等の方に心が向いて、それからモウ一度戻つて來て、此の世の中の人々と共に住んで世の中を導いて行く。斯う行くのが自然の順序で一足飛には行きませぬから、斯ういふ順序を経るのであります。

それで舍利弗がいふには、自分は「空法」といふこの世の中を離れた教を學んで、それで相當の覺りを得た。その時自分の心に思ふには、モウこれで宜しいのだ。自分はモウ「滅度」を得た。スツカリ世の中での迷ひや何かを皆無くしてしまつた、所謂最後



の覺りに到達することが出来たと思つて居つた。併し今自分で考へて見ると、これは本當の覺り方ではなかつた。まだ途中であつたといふことに今日氣が附きました。「自分は覺つた、世間は迷つて居る」と、斯う思ふのはまだ本當の覺りではない。一體人間の迷ひといふものは何處から起るか。普通に煩惱といへば欲張るとか、或は腹を立てるとか、恨むとか、嫉むとか、憎むとかいふやうなことが煩惱だと言つて居りますが、その煩惱といふもの、根本は何かといふと、小さい己れに執着すること、貪るといふのは人の物をこつちへ取りたいといふこと、つまり自分中心である。腹を立てるといふのは自分の思ふ通り人がやつて呉れないから不快に思ふだから煩惱といふものは要するに自己を中心にするのである。言ひ換へれば妄りに自己を分けて他の者を向ふに廻して自分だけ都合好くしようといふ、それが煩惱でせう。さうして見ると、自分が覺つて

つた。今日以後はこの佛の貴い教をスツカリ自分に身に體して、一生衆生を救ふことに力を盡したいと思ひますと申したのです。

若作佛することを得ん時は 三十二相を具し  
天人夜叉衆 龍神等恭敬せん  
是の時乃ち謂ふべし 永く盡滅して餘り無しと

(若得作佛時 具三十二相 天人夜叉衆 龍神等恭敬 是時乃可謂 永盡滅無餘)

若し自分がさういふやうに、世の中の人の爲に力を盡すことをたんに續けて行つて、佛と同じ境界になつたならば、その時には佛様と同じやうに三十二相を具へることも出来ませうし。天上界のものも人間界のものも、夜叉とか龍とか、天地の間の有らゆる者が皆自分を敬つて呉れるだらう。さうなつて初めて永く世間の悩み、世間の苦しみを滅し盡してモウこれ以上餘地が無いといふ境界になるのであら

世間は迷つて居ると言つて、迷つた世間の人間を眼の下に見下すといふこともこれも煩惱です。何故なら自己を分けて自分だけを……高いものにしてしようといふのだから是れはいかぬ。本當に覺つたといふことになれば、自分は覺つた、貴様達は迷つて居ると、そんな區別をすべきものではない。迷つて居る人間を一緒に自分の覺つた道に誘つて來るといふ、優しい潤い心持を有つのが、それが本當の覺りである。だから世の中を離れて、獨りで淨らかな行ひをして、それで滅度を得たと思ひ、一切の迷ひを除き盡したと思つて居つたのは間違つて居つた。それは「實の滅度にあらず」まだ本當の覺りではない世の有らゆる悩める者、有らゆる苦しめる者に對して同情を有つて、それを救ふことに力を盡すといふことになつて、初めて本當の覺りだといふことが今日になつてわかつた。それだから今日以後はその事を一心にやらうと思ふ。今までは考へが間違つて居

う。そこまで行かなければいけない。兎に角今まではまだ修行の途中だから、この邊で覺つたとか、わかつたとか思ふのは間違ひであつた。これからは一つ佛の境界に達するといふことを目標としてモット修行をしませう。さうして佛様のやうな心持になつて來れば、世間の者が皆自分に歸依して來るであらう。

佛 大眾の中に於て 我當に作佛すべしと説きたまふ

是の如き法音を聞きて 疑悔悉く已に除こりぬ

(佛於大眾中 說我當作佛 聞如法音 疑悔悉已除)

有難いことに佛様は大勢の中に於て、お前のやうなものでも菩薩の修行をして行けば、後には佛に成れるといふことを請合つて下さつた。洵に有難いことである。だから是の如き佛の言葉を聞きまして、「疑悔悉く已に除こりぬ」、永い間佛様のお弟



子になつて、なんだか繼子扱ひのやうなことをされて、つまらない、つまらないと思つて、疑つたり後悔したりしたところのヒネくれた心持が、今日になつてスツカリ無くなりました。

初め佛の所説を聞きて  
心中大に驚疑しき  
我が心を惛亂するに非ずやと

佛種々の縁  
譬諭を以て巧に言説し  
たまふ

其の心安きこと海の如し  
我聞きて疑網断じぬ

(初聞佛所説 心中大驚疑 將非魔作佛 惛亂我心耶 佛以三種種縁 譬諭巧言説 其心安如海 我聞疑網断)

一番初めに佛様の仰しやることを伺つた時には、心の中で驚いた。これは悪魔が佛の相になつて吾々の心を亂す爲に出て來たのではないかなどと思つた

ことかと思つたが決してさうではない。自分達も努力次第で佛に成れるといふことを説く爲に、先づ佛の境界の最も勝れたことを説かれたのであつて、その事が今明かにわかつた。それがわからない時には何だか途方もないことを言はれると思つて、悪魔が佛の相になつて自分達の信仰を亂すつもりで現はれて來たのかと思つた。ところが佛様は「種々の縁」即ち過去にあつた種々の事柄、「譬諭」即ち種々のたとへを以て巧みにお説きになつたので、だん／＼その教を伺つて居る間に、自分達の心が安らかになつて海の如く、本當に有難くなつた。その教を聞いて、前に起つた疑ひの心持は悉く無くなつた。佛説きたまはく過去世の方便の中に安住して

現在未來の佛

其の數量有ること無きまへり

此の一番初めに仰しやつた時といふのは、方便品に於て佛様が何と仰しやつたかといふと、「佛の境界は逆もお前達にはわからない、佛でなければ佛はわからないのだ。お前達の及ぶ所でない」といふことをお釋迦様は仰しやつた。それを聞いた時にびつくりしてしまつた。何故なら、自分達は佛様のお弟子になつて大に希望を有つて居つたが、佛様は逆もお前達にはわからぬぞと突き放すやうなことを仰しやるから、「これは大變だ、悪魔が佛の相になつて吾々の信仰を冷すつもりで言つたのかナ」と疑つて見た。併しながらだん／＼聞いて居ると、佛の境界を説かれるといふことは、自分達を隔てるのでなくして、お前達も修行次第では此處に來られるぞといふ意味なのであるから、さうすると前に仰しやつたことも本當にわかつた。教はやはり終ひまで聞かないとわからない。半分だけ聞いた時には、佛でなければわからないぞと言はれたから、逆も駄目だといふ

亦諸の方便を以て  
是の如き法を演説し

今者の世尊の如きも  
生じたまひしより及び出家し

得道し法輪を轉じたまふまて  
亦方便を以て説きたまふと

(佛説過去世 無量滅度佛 安住方便中 亦皆説是法 現在未來佛 其數無量有量 亦以諸方便 演説如法是法 如今者世尊 從生及出家 得道轉法輪 亦以方便説)

お釋迦様は、御自分ばかりではない、前の世の數限り無いとこつ佛様も、やはり方便といふことを考へられて、低い方から高い方へ、浅い方から深い方へとだん／＼と教へ導かれた。佛はその方便の教といふものゝ中に安住して、初めは方便、後には眞實の教を説かれるのだと、斯ういふことを仰しやつた。それから又現在の佛も未來の佛もその數は限り



無くあるけれども、その無量の佛様も、やはり方便を以て教をお説きになるのだといふことをお話し下さつた。それから「今者の世尊」、今自分の眼の前にゐらつしやるお釋迦様も、初めは出家をなさつて修行をなさつて、それから得道といつて覺りを開いて、その覺りを開いた後に法輪を轉するといつて、教をお説きになつたのであるが、其の際にやはり初めから眞實の教をお説きにならないで、方便を以て低い方からだん／＼説いて行かれて、結局一切の人間は皆佛に成れるぞといふことを打明けて説かれた斯ういふことが今明かにわかつた。

世尊は實道を説きたまふ  
是を以て我定めて知んぬ

波旬は此の事無し  
是れ魔の佛と作るに  
是非ず  
我疑網に墮するが故に  
是れ魔の所爲と謂へ

(世尊説實道) 波旬無此事 以是我定知 非是

はさういふお心持ではなかつたといふことがわかりました。

そこで「魔」といふことを序に申して置きたいと思ひます。よく何れの宗教でも惡魔といふことを申すのでありますが、惡魔とは一體どういふものであるか。日本でも随分魔が憑いたとか、いろ／＼魔といふことを申します。「ま」といふ言葉は、今では麻の下に鬼が附いた難しい字が書いてありますが、昔は斯ういふ字は支那にはなかつたらしい。一體魔といふのは印度の言葉で、支那には無かつた。漢學の方では、孔子の教や孟子の教の中には魔といふことがありませぬ。佛敎が傳つて後に魔といふ言葉が支那に入つて來た。佛敎の方では、印度の言葉でこれを「麻羅」と言ひます。始めの時分には「麻」の字を書いて印度の言葉の發音を表はした。此の漢字に何の意味も無いので、印度語で麻羅と言ふ、それを略して麻と言つたものです。後に「魔」の字を書

魔作佛 我墮疑網故 謂是魔所爲

であるから佛様は初めは低いことを説いて居らつしやつても、結局は御自分の覺り得られた所をその儘に打明けてお説き下さる。即ち愚かな者でも罪の深い者でも、修行次第に依つては佛と同じに成れるといふことを佛様は本當に説いて下さる。波旬は此の事無し」波旬といふのは惡魔のことで、惡魔にはそんなことはない。だから今此處で初めてわかつた今お前達は終には佛に成れるぞといふことまで言つて下さつたのだから「我定めて知んぬ」で、本當に能くわかりました。今まで仰しやつたことは惡魔が佛の相になつて言つたことではない、佛様が本當に大慈悲を以て吾々に言つて下さつたといふことがわかりました。自分達が疑惑の心持をもつて居て考へ方が足らなかつたものだから、佛様のお慈悲がわからないで、惡魔が出て來て自分を迷はしたなど思つた。それは自分の思ひ違ひであつて、決して佛様

くやうになりましたが、鬼みたやうに恐ろしいものだと思つて麻の下に鬼を附けたのでせう。麻羅といふ印度の言葉を支那の言葉に直譯すると「障」といふことで、人間が善い事をする障を爲すもの、これが魔です。ですから「魔」といふものは、寧ろ外界にあるよりは自分の心の中にある。斯ういふ風に思はれるのであります。魔がさすなどといふのも、外から來るのは少い。外から來る場合もあるだらうけれども、さういふ場合は寧ろ少くて、吾々の心の中にいろ／＼な間違つた念が起つて來る。それが惡魔だといふ風に思はれるのであります。外から來るのは防ぐことも出來るだらうけれども、自分の心の中に起つて來る間違ひといふものはナカ／＼防ぎにくい。それを防ぐやうにするといふことが、所謂魔に犯されないやうにする工夫であります。それで惡魔といふものを、古來算へてあります中にいろ／＼な分類がありますが、殊に私共が參考と



して大變有益だと思ふのは、十魔といつて惡魔を十に分けた説で、これを一通り申上げて見ようと思ひます。其の十魔といふのは、

- 一、蘊魔
- 二、煩惱魔
- 三、業魔
- 四、心魔
- 五、死魔
- 六、天魔
- 七、善根魔
- 八、三昧魔
- 九、善知識魔
- 十、菩提法智魔

第一に「蘊魔」、蘊といふのは五蘊と言ひまして身と心の作用のことです。それで蘊魔といふのはどういふのかといふと、吾々の身も心も不完全であるから、此の自分の身心の作用の不完全であるといふ

ことが自分の覺りの障礙になる。だから修養を積まなければいけない。生れながらの人間といふものは身も不完全であり、心も不完全である。一切の作用が皆不完全である。不完全な儘で修行をしないで生きて居れば、その不完全な心身が己れを妨げる。さうして一生涯碌な事もしないで死んでしまふ。これはつまり蘊魔に負けて終るのであります。普通の人には皆さうでせう。教育も宗教も倫理も道德も辨へない人といふものは、皆身も不完全、心も不完全である。その不完全といふことに氣が附かないで、その障礙を受けて死んでしまふ。所謂蘊魔の爲に終りを遂げるのであります。であるから人間は死ぬまで己れを修養しなければならぬ筈です。これで足れりといふことはない。自分の心や身の作用が元來不完全で居るのだから、それが障礙をなして、自分のさとりといふものが開けないで、一生涯を終つてしまふそれが即ち蘊魔であります。

次に「煩惱魔」といふのは、これは別に委しく説明をする必要もない。煩惱といふものが心に起ります、怒るゝか、貪るとか、憎むとか、嫉むとか、其の他いろいろ作用が起る。さういふ煩惱が自分に種類の障りをなして、煩惱のために使はれて一生涯つさらなく終つてしまふといふのが凡夫の習はしで、これは申すまでもないことであります。

その次に「業魔」といふのは、自分の今まで爲した仕業が自分で自分の妨げをする、これはつまり種類の行き懸りです。私共はどうしても今までの行き懸りを捨てるといふことが難かしい。「善い事だ」と思つても、今までやらない事はなか／＼やれない。「悪い事だ」と思つても、マア今日までやつて来たのだから何れその内に……と言つて延ばしてしまふこれが皆業魔で、自分の爲した業が自分の障礙をするのであります。これは私自身などもさうだと思ひますが、悪い事だと思ふけれども、今まで爲し來つ

た事であるからさう急に變へる譯にも行かない、いづれその内に……とやつて居る。支那の孟子といふ人が、梁の惠王といふ王様に説いた時に、どうもあなたの政治の執り方は間違つて居るモット王道に合ふやうにしなければならぬと説いた。梁の惠王が之を聞いて、お前の言ふことは尤もだけれども、何しろ永い間の習慣だから今急に止めるといふ譯にいかぬ、追々改良して行かうと思ふといふ返事をした。さうすると孟子が言ふには、それは奇態な事を仰しやる。あなたの子供が毎日毎日お隣りへ行つて雞を十羽づつ、盗んで来るのを、あなたが見て戒める時に、「成る程泥棒が悪いといふことはわかりました。しかし急にやめる譯には行かないから、十羽盗むのを七羽にし、五羽にし、二羽にして、その内にスツカリやめます」と言つたら、あなたはさう思ひますか。泥棒がいけないと思つたら、直ぐやめたら宜いではありませんか。だん／＼



にやめるといふのは間違つて居るでせう。今あなた  
の説はチヨウドそれと同じです。いけないと思つた  
ら直ぐやめたら宜しい。いづれ其の内少しづつ、止め  
ますといふのは、恰かも十羽の泥棒を五羽にし、三  
羽にするといふのと同じことではありませんかとい  
ふ議論をしました。随分激しい議論でありますけれ  
ども、實際其の通りであります。吾々も人の教を聞  
いて、善いと思つたら直ぐ實行すれば宜しい、悪い  
と思つたら直ぐやめれば宜しいわけです。ところが  
今まで爲した業が邪魔をして、「折角今日までやつ  
て来た事だからやめられない……」とか、「何しろ  
今日までやらなかつたのだから、いづれその内……」  
といふのでツイ、今までの習慣に引摺られて、間  
違つた事を續けて参ります。これは随分考へなけれ  
ばならぬ問題であります。

次に「心魔」といふのは、この心は利己心のこと  
です。自分を中心にして物事を考へる心持を言ひま

す。どうも人間は妄に自他の別を立て、自分の都合  
の宜いやうに物事を考へて居る。その自己を中心と  
する心持がいろ／＼の障りを爲して行く。これが心  
魔であります。

次に「死魔」といふのは、これは殊に吾々に適切  
なのでありますが、死ぬといふことを考へるからい  
けないといふのです。宗教的に申せば（この事はだ  
ん／＼後に出て参りますが）人間の身が死んだつて  
心は死ぬものではない。人間の心は永遠の存在であ  
る。ところがその事を考へないものだから、死ぬこ  
いふことが人生の終りであるかのやうに思ふ、それ  
で本當の修行が出来ない。若い方はさうでもないが  
吾々ぐらゐの年になるとモウ先が短い、今更何か習  
ひ始めたつて仕様がなと思ふ。それはつまり死と  
いふことに依つて人間の一生が終ると思ふ迷ひです  
それだから本當の修行が出来ませぬ。大概吾々の友  
達などに話をして見ますと、「どうも五十になつて

これから修行しても追ひつかない」と言ひます。皆  
それは死といふことで人間の存在の全體が終るのだ  
と思ふ間違ひから来る。人間の身は死んでも心は決  
してそれで終るものではないから、明日死ぬといふ  
前の日まで修行しても宜い、今死ぬといふその瞬間  
に一念發起しても宜い筈です。そこを忘れてしまつ  
て、人間の肉體の死ぬるのが、人間の本當の存在の  
終りだと考へる。この考へから本當の事が出来なく  
なる。これが死魔であります。斯んな事を言つて居  
る私自身もツヒさうです。私は年の若い時に始終脚  
氣が起つたものですから、水泳を習ひませぬので水  
に入れません。三十過ぎてから脚氣が癒りましたが  
モウこの年になつて子供と一緒に泳ぎをするのは取  
かしいと思つて、到頭今日までやらないのでありま  
す。本當はそんな筈はない、年を取つても善い事を  
覺えて損は無いのですけれども、やはり自分の一生  
といふものを五十年か六十年で區切りがつくと思ふ

から、「この年になつて……」といふ氣持になる。  
眞の永遠の命に比べれば、十歳の子供でも五十歳の  
親父でも同じことです。それを「俺は老人だ、若い  
者の仲間入は出来ない……」「モウ先が短い、今更  
修行してもつまらない……」といふ。愚かな話です  
けれどもさういふ氣がツヒある。それは皆死といふ  
考へが累ひを成すので、肉體の死が人間の本當の存  
在の終りであると思ふから本當の事が出来ませぬ。  
それが死魔であります。

それから「天魔」といふのは、これは印度の昔か  
らの傳説で、天上界から悪魔のやうなものが出て來  
て人の邪魔をするといふ。普通にはこればかりを悪  
魔といふやうに思つて居るけれども、これは魔の一  
種に過ぎない。さういふものもあると言はれて居り  
ます。

次に「善根魔」これから以下がナカ／＼難しいの  
であります。善根といふのは世の爲、人の爲に幾



らかでも力を盡すこと。その力を盡したといふことを自ら誇る心持が起る、それが自分の修行の累ひを爲す。少し世の爲に善い事をした人は、これだけ世間の爲に盡して居るからモウ澤山だといふ氣になつて来る、だからいけない。人間の爲すべき善事といふものは限り無いものです。どこまで行つても佛様には及ばないので、モウ此の邊で澤山だといふことは無い筈です。ところが善根を積んで、人の爲、世の爲にいくらか役に立つて、その善い事を誇りにして自ら恃みますから、モウそれから先の修行をしないやうになつてしまふ。ですから折角善根を積んだといふことが却つて其の人に取つては魔になつて、修行の障礙になるといふのが所謂善根魔であります。これは餘程考へなければいけない事です。達磨大師が印度から支那に渡つた時に、梁の武帝といふ天子に逢つた。これはナカク偉い天子で、王様としても大豪傑であります。佛教を奨励する

れから達磨に向つて、自分はこれだけ佛教の事に力を盡して居る、それを無功德だなどと言ふお前は一體何者だ、『朕に對する者は誰ぞ』と言ふと達磨は『不識』俺は識らないと言つて、パツトその座を去つてしまつたといふ話があります。これは決して達磨といふ人がヒネくれて言つたのではない。これを後世の人が解釋して、達磨の大慈悲であるといつた。折角梁の武帝といふ人は惻巧な人で善い事をし居るのだが、たゞ惜しい事に自分の善いことを誇りたいといふ心持がある。これを打破ればこの人は立派なものだ。だから覺醒を促したいといふ慈悲の心持から、こんな激しい言葉を出したのだといふことを、後世の人が説明して居るのであります。實際その通りであつて、折角善い事をしてその善い事を誇るやうな氣分が起きますと折角の善事は却つて累ひの因になりますから、そこを反省するといふことが所謂善根魔の説であります。要するに善根を積

ことに全力を注ぎまして、寺を澤山建て、坊さんを保護して、自分も佛教を研究致しまして、自ら大勢の家臣を集めて佛教の講釋をしたといふ位な偉い人です。その梁の武帝が、達磨大師が佛教を支那に弘める爲にやつて来た時に逢つて自分の話をした。自分は力及ばすと雖もこれだけの事をやつて居る、お寺を幾つも建てた、坊さんを保護し、佛教を弘める爲に是だけ力を盡した。『それで何の功德がある』と問うた。これだけ自分が骨折つた、この功德はどの位だらうと言つた所が達磨は一言にして『無功德』と答へた。これは有名な話です。功德が無いといふのは、それを誇る心持では駄目だ、これだけ善い事をしたからモウこれで宜からうといふ、そんな心持でやつては駄目だといふので、梁の武帝の覺醒を促す爲に功德は無いと答へた。梁の武帝は嘆息してしまつた。これだけ善い事をして居るのに無功德と言はれてはどうも割に合はないと思つたのでせう。そ

んだのは宜いが、その善根に誇りを感ずるから自分の障りになるといふのであります。それから『三昧魔』、三昧とは心が亂れないこと。心が亂れないといふことは久しい修養の結果であるが、此の状態になるとそこが危ない。『俺は覺つたモウ大丈夫だ』、斯うなつて、世間の迷つた人間を眼の下に見下すやうになると、モウそれで修行はおしまひです。ですから覺つたといふ、その覺りが却つて障りになる。これが三昧魔であります。これも随分世間に多いことで、少しばかり佛教の本などを讀つて見ると、世間の人に對して『どうも彼等は俗物で相手にならぬ』などと言ひたがる。その俗物だと言はれる人の方が餘程世の中の役に立つて居ることもある。自分が覺つたといふのが危ないものです。それから『善知識魔』、善知識といふのは先生のことですが、人の師として崇められることが危ない『先生々々』と言はれて居ると碌な者にならない。



吾々も學校で教へて居ると能く此事を感ずるのであり  
ますが、皆が「先生々々」と言ふ、だから私はよ  
く同僚に「お互ひに氣を附けないといけないぞ」と  
言ふのであります。先生などと言はれて碌なことは  
ありはしない。「先生々々」と言はれると自分も先  
生のやうな氣になつてしまふ。實を言ふと何もわか  
りはないが、「先生」と言はれるとわかつたやう  
な氣分になつてしまつて、自分を修養することを忘  
れる。人の師となるといふことは恐ろしいことです  
人の師となるといふことに依つて墮落するものがど  
れ程多いかわからない。これは私共永い間學校の先  
生をしてよく知つて居る。先生と言はれて碌なこと  
はありはしない、だん／＼自惚れてしまふ。自分で  
出來ない事でも、口で言つて居ると出來たやうな氣  
になつてしまふ。昨日讀んで來た事を今日此處で喋  
つても宜い、朝讀んだ事を晩喋つても宜い。さうし  
てそんな事は十年も前に知つて居るといふやうな顔

しまふ。それが菩提法智魔であります。よく聞く話  
であります、輕業師が長い竹の上に小さい子供を  
立たして上で藝をさせる。その時に下に親方が見て  
居つて、いよ／＼藝をしてしまつてサア降りて來る  
といふ時に「降りしろツ」と言ふ。竿の上で藝をし  
て居る時には滅多に墜ちない。藝が済んでモウ大丈  
夫だといふ所で能く墜ちる。だから藝の終つた時に  
必ず下から聲を掛けて「降りしろツ」と言ふものだ  
さうであります。さういふ譯で、モウ少しといふ所  
が危ない。それが菩提法智魔といふことです。私共  
が本を讀んで居つても、大分わかり掛けて來ると、  
モウ大概わかつたと思つて止してしまふモウ少し續  
けて居れば宜いのですけれども、その所が氣が短  
いのでうまく行きませぬ。斯ういふ事も魔として算  
へてあります。  
要するに魔といふのは道に入る障礙といふことで  
あります。いつでも魔を防ぐのには、自分で自分を

をすれば濟んでしまふ。だから人の師となつた爲に  
人を欺き、自分を欺くといふことを始終やる。これ  
は恐ろしいことで、ドン／＼人間が下落して行くので  
あります。善知識魔といふのは本當です、私共先生  
などをやつて居つて、實に身に泌みてわかつて居る  
支那の孟子が「好んで人の師となることはいけな  
い」と言つたのはそれでありました。人に教へるとい  
ふことは餘程大事なこと、ウツカリすると人に教  
へることをしながら自分が墮落して行くことになる  
これが善知識魔であります。  
次に「菩提法智魔」、菩提法智とは深く覺つた智  
慧といふことで、佛様に近い智慧であります。その  
佛に近い智慧を具へたといふところで、用心しない  
と、「モウ一步で佛様だ、モウ大丈夫だ」といふの  
で行き止りになる。決して大丈夫ではない、佛様と  
同じ所に行かない間は決して大丈夫ではないけれど  
も、モウ大丈夫といふ所でツヒ自分の修行が頭いて

誠めて、自分の心持の強みを除くといふことが、魔  
を降す何よりの道であるに相違ないのであります。  
これは序に「魔」といふことに就いて申上げたので  
今此處ではそんな意味でなくて宜い。たゞ惡魔が  
出て來て邪魔をしたのではないかと思つたといふ意  
味であります。

佛の柔輦の音 深遠に甚だ微妙にして  
清淨の法を演暢し  
たまふを聞きて 我が心六に歡喜し  
疑悔永く已に盡きて 實智の中に安住す  
我定めて當に作佛して 天人に敬はるることを  
爲す  
無上の法輪を轉じて 諸の菩薩を教化すべし  
（聞佛柔輦音 深遠甚微妙 演暢清淨法 我心大歡  
喜 疑悔永已盡 安住實智中 我定當作佛 爲天  
人所敬 轉無上法輪 教化諸菩薩上）



佛の音といふものは「柔軟」といつて、聴く者の心の中に障り無しに入つて来る。自然々々に自分の心の中にスラ／＼と障り無く入つて来るやうな、その佛の教を伺つて居ると、それは實に意味が深くして又微妙なものである。さうして清淨の法を述べて下さる。「清淨の法」とは、煩惱の少しも雜らない教といふことで、これは非常に大事なことです。幾ら教を説いても煩惱を雜へて説いたのでは佛法にはならない。人間の心に煩惱があるから、その煩惱に迎合するやうな、その迷ひを育てるやうな説き方をしたので、それは教といふものではない。金が欲しいといふ人に對して「信心すれば金が儲かるぞ」と言ふ。名譽が欲しいといふ人に對して「信心すれば出世するぞ」と言ふ。頭の痛いといふ人に對して「信心すれば病氣が癒るぞ」と言ふ。皆これは煩惱を雜へて居る。相手の要求を聞いて、それに合せて説いて居るのだから、そんな教へ方は本當の教へ方

も教はれるやうになり、さうして無上の法輪を轉ずること出来る。「法輪」といふものは教の世に弘まることが、車の輪の廻るやうに際も無く弘まるといふことで、この上も無い尊い佛の教を世に弘めてさうして「諸の菩薩を教化すべし」。自分達の教へる者は皆菩薩にしてしまふといふ。實はエライ理想です。菩薩といふのは自分獨り助かるのではない自分が助かると共に人を助けたいといふのが菩薩です。自分の説を聴く人々を皆さういふものにしてしまふといふ斯ういふ考へに今日なつた、これから後は大乗の教を能く學んで、自ら覺ると同時に人を覺らしめ、自ら救ふと同時に人を救ふといふ、この貴い道を世の中に弘めて、さうして自分の教を聞いた者は皆菩薩にしてしまふ。自分さへ助かれれば宜いといふ者は一人も無いやうに、残らずの人間が皆菩薩になつて、自分が助かると同時に人を助ける、自分が迷ひを除くと共に他の人間の迷ひを除かせると

ではない。本當の教は、其の眞の精神の通りに説けば宜い。その教をどう味はふか、それはその人の力によつてちがふが、説く方から相手の人の要求を聞いて、氣に入るやうに説くといふことであつては本當の教ではない。清淨の法といふのは本當の生一本の教、人間の煩惱に迎合するやうなことの少しも雜らない教、斯ういふ教を佛様は説いて下さつたさうして佛様の御心に信じて居らつしやることをその儘打明けて説いて下さつたのだから、自分は心に大變な歡喜を感じた。

「疑悔永く已に盡きて」、今までは佛のお弟子になりながら、本當の事もわからないで悔んで居りましたが、その悔んだ心持はスツカリ無くなつて「實智の中に安住す」と言つて、佛様の眞實の智慧の中に落着いて、佛の智慧を頼りとして自分も智慧を磨かう、さうしてだん／＼と修行して行けば、自分もキツト佛になつて、天上界のものにも人間界のものに

いふやうな、さういふ活動をさせてやらうといふ大決心をしました。斯ういふので、舍利弗の釋尊に對する感謝の言葉が終つて居るのであります。此の心持になればモウそれで宜い譯です。だから今度は授記といふことになつて、「宜しい、その心持を失ふな。その心持でズツト修行を續けて行けば結局お前は佛と同じになれるぞ」といふ、所謂授記といふことに移るのであります。無論菩薩の行を積んだからといつて、佛に成らない間は缺點もあり。間違ひもあるのでありますけれども、併し心の持ち方は、自分一人助かるのではなく一切の人を救ひたい、自分一人覺るのでなく凡ての人を覺らせたいといふことにある。この大局に心を向けて行くのが即ち菩薩の行であつて、その菩薩の心持を失はなければ、もし失敗したら出直せば宜い間違へたら又やり直せば宜い。人間のことでありますから間違ひは起りますが、間違ふ度にまた出直し



て、世の爲、人の爲に力を盡す。それが結局は自分の爲でもありませんから、さういふ方に向けて行けば宜しいのであります。舍利弗がその大決心を茲に告白致しました。お釋迦様がその大決心をお聴きにな

つて非常に喜ばれて、その心持を以て行けば必ず未來に於ては佛と同じ境界になれるぞ、といふことを許される、これからその授記の一段になるのであります。

小林先生

### 法華經講話 第五輯

菊判二百餘頁  
定價金五拾錢  
送料金六錢

本書には方便品と譬喩品の一部が説かれて前同様總振かな付てあり、代價も洵にお廉いのです。この一冊ばかりを手にされた方でも、必ず心の糧として貴いものを得られませう。

### 申込所

東京市小石川區音羽町六丁目  
財團 法團 統 一 團

電話牛込五三三六番  
無替口座東京九四二〇番

第一、二輯買切。第三、四輯殘本少數

## さる未亡人へ

笹木 欣爾

先日は參上して失禮いたしました。つひこないだの御不幸だと思ふて居りましたのに、モウ五七日が参りまして、今更らに時足の早いのにかかれます。が、時は一日一日と去つて行つても、あなた様のなき御主人に對する御追憶は、日と共に無量なものがおありで御座います。私といたしまして、亦、求むる道と同じくした同僚の友として、なくなられた御主人様のこと々々も、日のたつのに連れて、色々と思ひ出しもいたします。そして、世に在りし日のあれやこれやの御姿を心に浮べては、胸の何とはなしに一アばいになつて来るを覺えます。

今おもし返してみれば、御主人様に關する私の思ひ出は敢へて二三にはとまりません。道交十年、決して短いものではありますまい。従つて、鳥渡野郎すれば、様々のことが心の

内に繰りひろげられて往きます。ですが、いまだにマザ／＼とした清新な印象を残して居りますのは、今年の私宅に於ける寒行會の一夜、数名の同僚の方々と共々、御話をかした時のことでありませう。

御主人様は、どちらか申せば口數の少ない方でありました。その時、我々の雑談を火鉢に御手を敷しながら俯向き膝立ちに黙々と聞いておでましたが、その内にこんな言葉を御持みになりました。「信仰々々口では云つても、さて信仰はなか／＼むづかしいものでな——と。この言葉は、我々御互ひに信仰を求むる者にあつては、度々口に出される處で、今、御主人様からこれを承つたからと云つて、別段珍らしくも何ともないのです。だが黙々として永い間信仰を求められてゐた御方から、シミ／＼とした迷懐としてうかゞふ時、色々の意味で教へられもし、又、心からうたれもいたしたのでした。私はその時、自分も同感なる言を御答して、その場は話が他へ進んでそのまゝとなつて了りましたが、今考へると、その時の御主人様の御姿は、餘りにもハツキリと私の心にのこつて居ります。

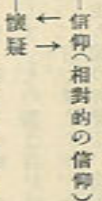
新しい印象も、時のたつと共に變つてそれは古ぼけた記憶と變つて了ふものですが、この時の印象ばかりは半年たつた今日でさへ、いまだにマザ／＼しい印象として、私の胸中に甦りつけられてゐるので御座います。そして實はこれがなき御主人様と私との、今生に於ける最後の御別れとなつて了つたのでありませう。

御主人様は市井の一商賈として、五十一年の實生活に於いて日常體驗は充分に御豊富でおありでありました。實生活に練られ、鍛へられた方が、永い間眞摯に道を御求めになり、その結果として、少くない口數を切つてさて「信仰はなか／＼むづかしいものだな」と仰言つたのですから、何も珍らしい言葉ではありませんが、その珍らしくない御言葉の内に私は私の心をうたれたのでありませう。しかも、信仰はむづかしいと云はれながら、決して信仰を捨て去るわけではなく、むしろ普通の信仰人以上に、本佛を求められたに至りましては、此の短い一語に、本當に無限の意味を見出すには居られませぬ。



俗塵を厭ふて世を通れ、一意只管に道を求め、信なる一事は難中の最難事で御座います。それを複雑な市井の生活を替みながら、みづを破り、道を通んで行くことの至難なるは、蓋し言を俟たない處であります。事實「信仰はなかくむづかしいもの」なのでありませうが、御主人様は、むづかしいと云はれながらも、尙かつ、信仰をお求めになりました。ひとめにくいと申されつゝも、いよいよますます、みづを崇めておいでになりました。これは鳥渡考へますと、信じようとする心と、疑はんとする心と、則ち信仰と懷疑との相反する相對の世界に迷ふてゐて、如何にも信仰上の安定がない様に見受けられますが、尙くまで信仰を捨てられなかつた處に、結局は、信仰と懷疑なる二つの心が互に相争ふ相對的な心の世界を超越して、寛い絕對的信仰の世界に遊戯なされ、月並ならぬ法悦を満喫されてゐたことになるのです。疑はんとする心に相對する信じようとする心、これが相對的の信仰であるなら、相對する信仰と懷疑なる二つの心を否定することなしに、二つをあるがままにして今一步高い境地に進んだ

絕對的の信仰



信仰の世界、これを絕對的の信仰と呼ぶことが出来ませう。 顯示すればこんなことになりませう。御主人様の「なかくむづかしい」と云はれた信仰なるものは、右の中の相對的の信仰を云はれたので御座います。しかしこれでは、相對的の信仰と、絕對的の信仰とが、何ですか別もの、様になりますので、まだ本當の顯示とは申せません。「信仰はむづかしい」と云はれて信仰と懷疑との間に迷はれつゝ、然るも信仰を尙くまで堅持なされた心そのものが、直ちに、絕對的信仰の心なのであつて、むづかしいと云はれた相對的の信仰の世界と、絕對的信仰の世界と、此の二つは鳥渡は別もの様に見えても、その實、決して別ものではないのです。信仰と懷疑との二つを引くくめて、それを絕對的の信仰の世界と、私は云ふのであります。

信仰

この一團がこのまゝ、絕對的の信仰なのです。云ひかえれば、絕對的の信仰は、相對的の信仰と

吉の方が望ましくあります。世の中が對立對立で成り立つてゐる限り、我々は常にその何れかの一つを選ばんとして迷ひ、いきほひ人間生活から煩惱なるものは所詮取り切れぬと云ふことに立ち至ります。そして、もし二つの内の何れかの一方を選び得たにしろ、全能ならぬ人間の風情を以つてしては、その一方のみには到底満足し切れぬものと思はれます。信仰と懷疑との一例をさるなら、たとへ一反は信仰の世界をかちえたとしても、神ならぬ私共には、常に信仰の世界にのみ遁入り切つて、四六時中絶えず法悦の一角に止住してゐると云ふわけには、到底参りませぬ。信仰の目には、間々懷疑の暗雲が覆ひかゝります。信仰の存在も事實なら、懷疑も事實存在いたして居ります。大體に於いて信仰の世界に生きて居りませうとも、時に懷疑に襲はれるのも亦仕方ないことでありませう。信仰を求むる者にまつて、懷疑の心のどこにもなく確き起つてくる位、悲しいイライラした氣持は又とありません。が、信仰に相對して懷疑なるもの、存在いたすからには、これは誠に止むを得ないことで御座います。懷疑心の全

くない純然たる信仰三昧の一角、これは人間にありましては、望む可くして終に實現され得ない境涯なのではないでせうか。

世には傑出した人も澤山ありますから、中には此の對立を立派に克服して、己れのこゝろさす一方の世界にのみ遁入り切り得る人もないではないでせう。興り起る懷疑を完全に近く否定して、信仰三昧の法悦境に停住する人がなくもない様ですが、よく考へますれば、その克服否定も程度問題なのであつて、誰が相對する一方の世界にのみ完全に遁入り切り得ませう。尊嚴の菩薩さまへ、この問題には迷はれた節々が御見受けされるのです。對立する二つの世界、今は別して信仰と懷疑の二、これは恐らくは永久に人間に残された迷ふ可き問題なのではありますまいか。

○

懷疑に對する信仰、則ち相對的の信仰の世界には、私共は先づ生き切れません。懷疑は懷疑としてその存在を認めた上で、私共の信

それから懷疑とから出来てゐるのであります。少しも疑ふ心があつて、これを絕對的信仰だなど云ふと、誠に解し難い様ではあります。その點は次に申し上げるとして、今の場合は懷疑を一方に持ちながら他方には決して信仰をすてないと云ふ處に尊い本當の信仰の世界があると云ふことを申し上げれば足ります。

○

操、私ども生活してゐる此の世の中は、色の角度から様々に觀察することが出来ませうが、凡そ二つの相對するものから成り立つてゐるとも申せませう。對立、實際世の中は相反する二つのもの、對立から成り立つて居ります。上下、左右、大小、高低、賢愚、美醜、生死、貧富、禍福、吉凶、其他數へ挙げれば際限もありませんが、有形無形に皆對立對立で出来て居ります。そして、此の相對する二つの内の何れか一方を選び取り、他の一方を捨て去らうとして迷ふ處に、實に煩惱の起る可き境があるので御座います。上記の例で申せば、事實、愚よりは賢の方が望ましく、醜よりは美の方が望ましく、又凶よりは

仰を見出すより外は御座いません。こゝに、前に申上げた絕對的の信仰の世界なるものが取り出されて参ります。

信仰と懷疑との相反する二つのものが、我が一心の中に互に争つてはゐても、たゆまず懷疑を求めて行く心の貌、これこそ相對的信仰以上の絕對的な本當の信仰の世界なのではないでせうか。これにあつては、信仰を求めの過程に於いて、時に懷疑が起つても一向に差障へなく、決して途中で退轉することは御座いません。信仰の起つた際には、以前にも増した熱烈な信仰が反動的に形作られるので、信仰は新しい懷疑への踏台とはなれなく懐みの種とはなりません。信仰、懷疑、信仰、懷疑、信仰の過程が、そのまゝ大きな一つの信仰なのです。信仰なるものを懷疑と相對的に見るから、時に信仰の滯滞を起すので、信仰と懷疑とを引くくめて、一つの大きな信仰と觀察すれば、そこに信仰の絕對境が出て来るわけです。かうなると、前には厭はしかつた懷疑が、こゝには立派に意義附けられて参ります。

たい必要とする處は、一時信仰の時雲が低



迷しても、時を待たず必ず信仰への思慕の念を呼び返すこととす。懐疑の起つた時、決して懐疑に心を迷はされるには及びません。少し時がたてば薄らいでゆきます。氣にすれば懐疑そのものよりそれを氣にする懐疑心の方に、我と我が心をいためればなりません。懐疑が信仰上の邪魔になるのは、懐疑そのものより、懐疑を長れる懐疑以外の懐疑心である緣で御座います。

話下手な人間が、少々面倒な話を始めましたので、或は御解りにくかつたかとも存じます。左に一ツの實例を擧げることをお救し下さい。

○ 私の知人に一人の未亡人があります。一男一女があり、生活は保護されてゐるので小ザンマリと暮して居ります。處が昔を過ぎた上の男の子が若干軟派に近く、大學は難があるだけで一向に出席せず、月々の浪費は鳥渡きいたゞけでは信ぜられない多額にまで及んで居ります。私は、未亡人に會ふ毎に、この子のこぼし話を聞かされるのを當といたします。時には、あんな道楽息子は一層死んでくれた

方がよいなど云ふ、極端な言葉をさへもらすのを聞きます。しかし此の婦人は、果して心から子が憎いのでせうか。母親として思ふ可からざる極端な言葉をもらす位ですから、子供には餘程手をやいてゐるに違ひありません。憎いと思ふ時には、事實憎いのでせう。が、だからと云つて、此の言葉を本當に信じられるわけには行きません。此の未亡人の「子憎し」とする念は、前にも云ひました相對的の憎しみなので、憎いために憎いと云ふ絕對的のものではありますまい。その證據には、次の機會に未亡人に會ふと、前とは打つて變つて一人息子の立派な成人を誇り出しもいたすのです。憎いと云つたのは、本能的に子が可愛いその内に、且く憎いと申したに過ぎないのです。その時／＼によつて、或は可愛く或は憎く、感情の上に若干の動搖出入がありましても、結局は大きく子が可愛いのに何の不審もありません。憎いと思つた後に取り戻した子に對する愛には、却つて一段と眞劍なものさへ御座います。

○ 私共の信仰も、こんなものではありますまいか。生身の人間であつて見れば、或は時に精進するのが、我々御互ひ人間としての信仰生活なので御座いますまいか。「信仰はなかなかむづかしい」といふのが、むづかしいが故にこそ、いよ／＼信仰を求めずにはゐられないのではないでせうか。

○ 亡き御主人様は、最愛の御實子たる一男一女を皆已に失はれ、今又、遠くも御主人様を失ひになりました。御愁傷のほど、お察しいたすに餘りありません。同じ夫を失つたのである。一人の娘が窪尼には如何に生活への張り合ひをあたへたことで御座います。あなた様は、最後に残つたタツタ一人の御嬢様を妙齡にしてお失ひになつて居ります。そして今は御主人様までな。

○ どうか時には起る懐疑に氣を腐らせにならず、信仰思求の一念に御生き下さいませ。最後に御遺文の一篇の口語譯を書き添へて、以上私の下手な話に補ひをつけたいと存じます夫を失ふた婦人への御言葉で御座います。

懐疑の心が過ぎもいたしませう。年が年中、信仰三昧の法悦境に没り切れるものではありませぬ。信仰と懐疑とが摺り合はつて、大きな堅い絕對的信仰の大綱が出来上るものと考へます。大局の前の微動に煩はさるゝには及びませぬ。否、懐疑も實は絕對的信仰の一要素でさへあるのです。懐疑の動搖がおきたら暫くはその動搖に逆はすに、身をまかせることです。動搖に懸げば、それは鎮らすして却つて動搖の度を増すのみで御座います。懐疑が起きて、平時時の法悦を見失ふたからとて驚き周章するに、露、及びませぬ。

○ 問題はたい、動搖しつゝもそれが續つたら一刻も早く信仰思求の一念を取り返すことです。動搖の後の信仰は、又一段と色を増します。信仰と懐疑と信仰、この過程は、決して厭ふ可きには非ずして、私共信仰の喜ばしい發展向上への道程であるのです。懐疑に懐疑するに當りませぬ。懐疑の谷を渡り、動搖の川をこえればこそ、その結果としてかえりて信仰に味があるのです。要は、谷や川に氣を腐らせないで進むことです。信仰思求の一念を失はぬことで御座います。

○ かの女房の歎きは、どの様かと思ふと實に氣の毒である。例へると、藤の花が松に絡まつて咲き誇つてゐるのに、松が俄かに仆れ、蕨が垣に懸つてゐるのに、垣が壊れたやうに、たよりないことであらう。内へ入れれば主人は居す丁度破れた家に肝心な柱がないやうなものである。客人が来て、外へ出て應對する人もない。夜の間は寂しく、墓を見れば表はあつても聲は聞えない又思ひやれば、なき主人は、死出の山や三途の河を誰を相手にして越されてゐるであらう。たゞ獨りでどんなに歎いて居られやう。後に遺した妻子たちはなぜ自分獨りを冥途の旅へ送るのであらう。そんな浅い契りではなかつたのだと歎いてゐられるに相違ない、その上、秋の夜が更けるにつけ、冬の嵐を聞くにつけ、いよ／＼亡き主人に對する女房の御歎きは深くなつて行かれるであらう。南無妙法蓮華經

○ (妙法比丘尼御返事 繪圖遺文一七八頁)

では、御免下さい。乍末筆御身體くれぐれも御氣を御つけ遊ばすやう新念仕ります。



記事

福島支部報

四月二十八日(火) 磯部先生の御來福を仰ぎ午後七時より中村様方に於て例會を開催す。丁度本日は日蓮聖人立教開宗の當日に相當し、建長五年の本月本日聖人は房總の一角清澄山の頂上に於て折からの朝霧を破つて昇る太陽に向つて初めて支那を唱へ出された、その立教開宗の當日に於て吾等は先生の御講話に接することが出来誠に意義深き事であつた。高僧會員及新入會員諸君も御出席になり先生には殊に新入會員諸君の爲に信仰の必要を叫ばれその信仰が、日蓮聖人の正しき主義主張に基づき完全なる信仰であらねばならぬことを種々比較論及せられ滿堂に強き感動を興へられた。次いで岩淵先生、原田様夏谷様等より入信の動機に就いて各自の體驗を拜聴し誠に有意義なる集ひであつた。會員一同法悦に滿たされ和氣満々裡に十一時散會す。

四月二十九日(水) 午後一時より高商日蓮聖人續會新入會員の歡迎會を開催す、正に天長の佳節に當り、新入會員の歡迎會を開くことが出来たのは誠に喜ばしき限りであつた。

一、磯部先生御講話  
前日同様信仰の確固たる把握を叫ばれ、次の三點に於て日蓮聖人の教義が如何に偉大であるか、而して現代我々の信仰すべき宗教として最も適切なる所以を述べられた。即ち、第一その主張が眞理の上に立脚したものであること、第二、奮闘精進の教へであること、第三、國家と宗教の不可分なること。  
殊に第二の點に於て一同各自の精進を心中深く誓つたのであつた。  
二、新入會員歡迎の辭：幹事  
三、吉松會長の新入會員に對する御訓話  
三、支部會員御挨拶  
五、會の使命沿革歴史仕事等について：幹事  
六、自己紹介  
十、閉會の辭  
斯くて新入會員諸君の心中にある何物かを興へ午後四時散會す。

(伊藤校長は滿洲旅行の爲に御欠席は残念であつた)

本多日生上人の末子であられた正夫君は、靜岡高等學校に在學中、去る五月十九日、僅々三日の病臥で、二十歳を一期とし長逝、今更ながら人生の無常迅速な事を如實に示現された。今は寂光の寶土で父上と現世の有様を親しく物語られてゐることを信する時に言ひ知れぬ感にうたれる、噫。南無妙法蓮華經……  
度て其御冥福をお祈り申上げる。  
法號  
本學院淨信日正居士

寄附金維持及團費誌料領收

(自四月二十一日至五月二十日)

- 一金壹圓也 東京 小峰 魯子殿
- 一金五圓也 足利 山口 餘造殿
- 一金拾圓也 東京 柴田 武治殿
- 一金七拾貳錢也 大阪 山乃神傳清開殿
- 一金貳圓五拾錢也 靜岡縣 古市 二郎殿
- 一金貳圓貳拾錢也 京都 金光 日心殿
- 一金壹圓貳拾錢也 川口 伊坂 さと殿
- 一金壹圓貳拾錢也 東京 鈴木 建國殿
- 一金貳圓貳拾錢也 小倉 齊藤又治郎殿
- 一金貳圓也 東京 沼部彌太郎殿
- 一金貳圓也 同 濱中治三郎殿
- 一金五圓也 同 田中峰太郎殿
- 一金壹圓也 同 越山唯四郎殿
- 一金貳圓貳拾錢也 愛知縣 武藤 照憲殿
- 一金五圓也 東京 岸野藤右衛門殿
- 一金貳圓貳拾錢也 同 川本 鏡作殿
- 一金壹圓也 同 齊藤 正山殿
- 一金參圓也 東京 竹内 文治殿
- 一金壹圓貳拾錢也 同 青山 信市殿
- 一金參圓也 同 宇野 博賢殿

- 一金貳圓五拾錢也 静岡 須賀崎之助殿
- 一金六拾五錢也 東京 吉田かつゑ殿
- 一金貳圓五拾錢也 新潟縣 高橋 大吉殿
- 一金四圓四拾錢也 千葉縣 山田 平八殿
- 一金五圓也 札幌 林 啓太郎殿
- 一金貳圓貳拾錢也 神戸 廣木 月子殿
- 一金壹圓也 東京 柳下 日實殿
- 一金拾圓也 横濱 高田 富久殿
- 一金貳圓貳拾錢也 福生 大塚 イシ殿
- 一金七拾貳錢也 大阪 山乃野藤清開殿

- 一金壹圓貳拾錢也 萩 小野ツネ子殿
  - 一金壹圓也 東京 小峰 豐子殿
  - 一金貳圓貳拾錢也 靜岡縣 桑原 就右殿
  - 一金貳圓貳拾錢也 萩 岩崎 又穂殿
  - 一金貳拾圓也 東京 井上道太郎殿
- 右難有入帳仕候也  
財團法人統一團會計

感謝

一家の柱石であす御主人の御病逝に遣はれ乍らも、彌彌強盛の信心に安住し、その追善供養のおぼし召を以て、特に本團の淨業に對して左記の通り御高援を戴いた事を深謝致しますと共に、御趣旨に添ふべく益々大法光顯に精進致したいと存じます。  
茲に度て御夫君の御冥福をお祈り申上ます。  
南無妙法蓮華經………合掌

- 一金壹百圓也 横濱 高田 富久殿
- 一金參百圓也 東京 堀江 千代殿



清水龍山

守屋貫教  
鈴木一成

中谷良英  
榊原久遠

共編

內容見本呈上

# 新修 略註 日蓮聖人遺文集

再版  
改訂

科段 御遺文百廿余編(脚註入)  
別註

御義口傳  
御講聞書  
妙行要文集  
一日一訓  
聖語字解

体裁 裝幀

卷頭挿入ククリムアト寫眞版七葉  
四六版 縦六寸二分 横三寸五分  
紙數 千百十四頁  
特製 皮 三方金  
並製 總タロース 天金  
函入最上美本

發行所

久遠閣

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

電話日本橋三二一七番  
區部口座東京七二八〇六番

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓			金壹圓五拾錢
日蓮主義精要			金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值			金貳拾五錢
法華經要品			金五拾錢
日生上人レコード			金參圓廿五錢
本尊意識に就て			金貳拾錢
藤部滿華譯註			金貳拾錢

本多日生上人  
勳行作法  
河合珍明著  
皇道と日蓮主義

特別送料共	金壹圓七拾錢
特別送料共	金拾錢
定價	金壹圓

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六丁目

「教」

發行所

振替口座東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六一ノ七

財團法人 統一出版部

振替東京九四〇番

統一定價

一册	全貳拾錢	送料壹錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料壹錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ奉  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲致候  
▲御轉居ノ場合ハ必ず新荷共直ニ御  
通知ノ事

昭和十一年五月廿七日 印刷納本  
昭和十一年六月一日 發行

(第四百九十五號)

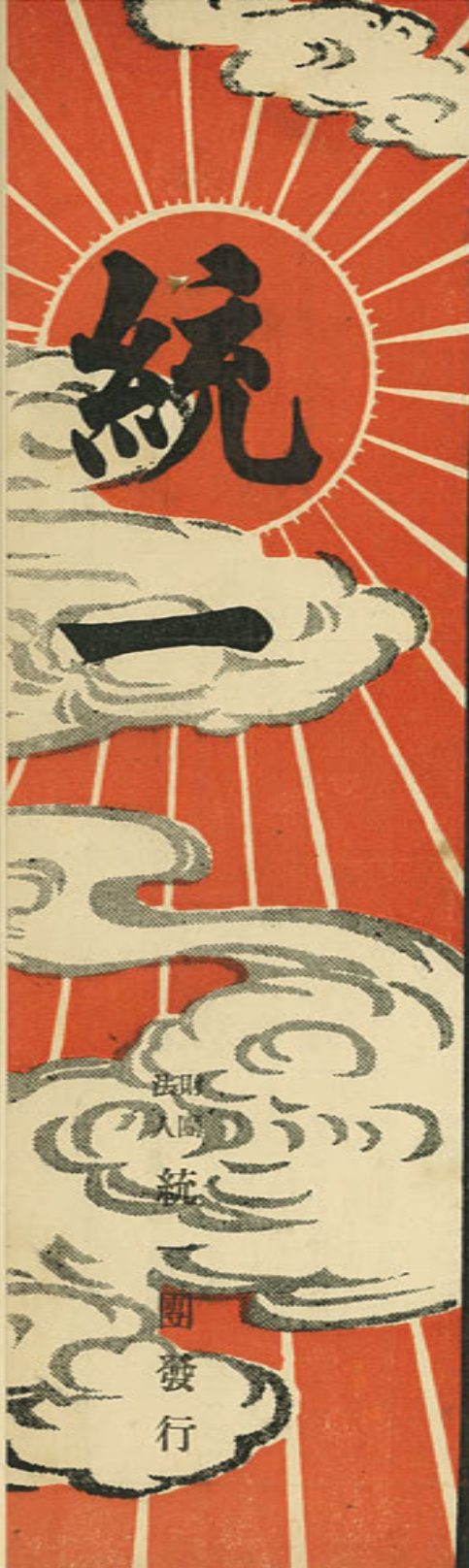
不許複製

東京市小石川區音羽町六一ノ七  
編輯人 磯部滿事  
發行人 磯部滿事  
印刷人 大辻松太郎  
東京市品川區南品川二ノ一八一  
印刷所 都印刷所  
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團

電話牛込五三三六番  
且且東京九四二〇番





目 次

聖訓摘要	……	日生上人
日蓮宗概観(其四)	……	故梶木顯正
破邪顯正(其二)	……	磯部滿事
法華經講話(第三十一講)	……	小林一郎
孟蘭盆のお話	……	道重信教
記事	……	

○本部團報地方致報 ○寄附金維持及團費誌料領收